(ヨ6A-4)

小楠遺稿

緒言

一余の始めて遺稿編纂の志を起せしは明治十四年の頃にあり當時余思へらく若し今にして收集するに非ずんば歳月の逝くと共に次第に散逸して遂に復收む可らざるに至らんと又思らく先考不幸にして凶變死に遭ひ畢生養成するの志の將に漸く伸びんとするに當り空しく世を去れりせめては其遺稿を公にして以て其志のありし處その識見の存せし處を明にせんと爾後先人と交遊せし處の諸君に就き汎く書翰著述詩文類を探索して怠らざりし今や幸にして其大概は原本により或は寫本により集收し得たりと信ず

一前に云ふ如く此書はその目的とする處第一遺稿を後世に保存するにあり第二公平にありのまゝの材料を出して先人その人の爲人と

国立国会図書館
25.9.19
214475

識見とを世人に見せしめんとするにあり敢て茲にその人物を品評しその思想を分析し西洋に云ふ所のバイオグラフィーなる者を編成せんとするに非す此事は後年その人起るありて筆を執る事もあらん只卷首に小傳を掲け平生の履歷言行を叙述し以て遺稿を讀む人の便に供す

一松平慶永侯勝安芳伯長岡護美男には序文或は題辭を贈り賜はり剰へ金幣をも賜はりて出版の費用を助けられたり殊に勝伯よりは特別の恩顧を蒙れり余は先つ此三公に對して謹んで鳴謝せさる可からす

一村田氏壽君由利公正君元田永孚君よりは材料の蒐集に付き或は其編成に付き厚き配慮を辱ふせり其他池邊節松君安場保和君山田武甫君嘉悅氏房君内藤泰吉君等より亦〻幾多の好意を蒙れり此諸君に對して深く感謝の意を表せさる可らす其他先考舊故の諸君にして種々好意を表せられし方々少しとせす茲に悉く芳名を掲けて鳴謝し能はさるを憾む

一本書材料の蒐集に就ては德富一敬江口高廉の兩君多年煩紊の勞に當られ且つ其材料の撰擇順序の配列等一切の編輯事務は右兩君及德富猪一郎君專ら之に任せられ小傳及卷頭篇首の附記小言等は皆江口君の筆になれり亦湯淺治郎君は始終出版事務を主理せられたり其他上野岩太郎氏は編輯事務を助けられ校正には福田和五郎德富健次郎二氏の助力を乞へり此書を今日公にするを得たるは偏に右に列記せる諸君の補助ありしによる今謹んで之を鳴謝す

一此書は幾多の材料中より撰擇して以て編輯せしものなれは書翰類漢文類等にして載せざるもの少なからず然れとも苟も時事に關し或は先考の身上に關係あるものは皆悉く載するを得たりと信す然れとも若し遺漏もあらは幸に讀者諸君の報知を乞ふ

一卷首に掲くる處の肖像は安政五年越前駐在中春嶽公の需に從ひ寫眞せるものに基く當時寫法未た開けず僅かに髣髴として其相貌を存するのみ山本芳翠氏之を摸寫し生巧館に於て彫刻するものなり素より原寫眞の不完全なるが爲め滿足ならずと雖も亦全く肖さるに非ず無きに勝る事千萬なり是偏に春嶽公の賜と謂ふべし

一嗚呼先考歿して茲に二十年此書漸く成りて世に公けにす不肖非才薄識此書も亦極めて完全ならざるべく一に先考の意に滿ざらんことを恐る然れともその是丈に成るを得しは偏へに先述せる諸君の庇蔭による

明治廿二年二月下旬　　不肖時雄謹誌

再版緒言

一本書初版を公にせしよりは已に十春秋を過ぎしがこゝにこれを再版せんとするに當り人事の變特に驚くべきことあり即ち嚮きに本書の編纂に關し厚意を賜はりし人々の多くは世を去られしことにして松平春嶽公を始め元田永孚池邊節松山田武甫江口高廉等の諸先輩今は皆再び就きて親しく其教を聞くに由なし更に眼を轉じて此間に於ける社會政治の變遷を顧みれば又實に多端なるを見るされど帝國議會の開設と云ひ條約改正の完成と云ひ廿七八年の戰役と云ひ靜にこれを觀察すれば孰れも維新當時の規模經綸の事業上に表はれ來りしに外ならずして明治中興の歴史はこゝに三十年の星霜を經て略ぼ其一段落を告げしの觀あり嗚呼當時の先輩開國尊

英雄事

王の大國是を唱へて國論を一統し其身或は凶刃に斃れ人事の慘を極めしと雖も其志趣操行人生一代を過ぎて今や漸く將に世に明ならんとす其生其死空しからずといふべき歟

一卷首掲ぐる處の肖像は素と春嶽公より賜はりし寫眞に基き原田直次郎氏が油繪に寫しゝものを再び寫眞に取り小川一眞氏に托して寫眞版に製せしめたるものにして初版に掲げしものに比すれば稍々眞に近かるべきか卷末に出しゝ鴻雪爪翁の題詩も今回新に加へしものなれど其他は凡て初版と異ることなし但書翰編次の順序を改め若くは活字の誤植を校訂せしは少しとせず

明治三十一年四月中旬　　編者誌す

述芳

明治廿二年丁春
二月
小楠先生門人
從一位源慶永書

御藏書

洪歲時記小補序

西山舊藏洪公童子時
所作之手澤藏諸
帝室爲物之重使之意也

切所以志趣大非今之所合
耳
仅仅廿字足以窥见先生
胸中丘壑即可一世之气
承示诗存集箧底墨痕
拜读不具赞何繇述吾言
莫赏余亦老矣人之关达
稿已集骚之经可图跋
出复平生以志衷感
廿二年初春

中子
山丹樓主人

電眼烱烱射五洲奇戈
天授誰與儔
尊王籌策邁往古
奈與廟謨宏遠猷
學問淵源道統正

中子
山母於吉

電眼烱烱射五洲奇文
天授誰與儔
尊王籌策邁往古
奈與廟謨宏遠猷
學問淵源道統正

識高論卓第一流
名並元勲身早死
猶餘遺墨照千秋
七丑春日友人長岡護美

小川一真製

敬高論卓勢一流
名並元勲身早死
猶餘遺墨照千秋
七年春日友人長岡護美

小楠堂先生寫照一枚

余靈岸邸閑居ノ時先生寫照ヲ乞フヲ以寫サシムル物ナリ

出来時寫法未開故朗ニ寫スアタハス乍併先生ノ容顔ハ

髣髴トシテ存セリ先生今日存生シアラハ寫照明了ノ

ミナラス高德意ニテ内ニ輔キテ聖政補賛ノ功モ多カルヘシ

コレヲ遺憾トス先生ノ小照ヲ乞フモノニ付授スルモノハ其門生

春彦 水 明治八年四月廿日

新を生懐三千年向

公一日如後天人ぬ

弓看反西三百風雲日光

東和

書藤先生遺像 横井春

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

堯舜孔子之道老

西洋器械之術何

止爲國用止強兵布

大義於四海而已

有逆於心自克人心振

德方所歸為自正心

正心破事——君子之學

在修身

錄二條送左大二姓

少術

神知靈變人滑如
泉不用作為付自
然安貴世更復

世宗皇帝三世

曰皇天 明前世王者之道盡心於當世以開後世謂之君子之志

○大將軍上洛謝別世之應禮

○示諸度參勤為述

職

○歸諸庚室家
○不限外蕃普代撰
賢為政官
○天開言路與天下為
○公共之政
○喚海軍強兵威
○齊金銀銅鉛公貨幣
○開天下金礦

口止相対交易為宜交
易

一中興ニ立志今日ニ有リ
今日立志ヲ以テ立心ヲ
他日ニ求ム豈式理ヲ人
ヤ

一皇天を敬し祖先を尊し
父に報する大孝なり
一其家を尊ぶ所一匹夫も
卑に降る人情察知識
を明らかにす
一習氣を去り良心を
虛靈虛久心に仇敵
なきん乎

一語怠こゝ心なれば事業を
怠ることなかれ学問を
勉めすゝめて何をか我業を
磨かんや

一忠言必ず逆耳巧言必ず順
心病々狂者一杯の毒
すんい酒なり
一戦争し怪怪恒茶氏ゝ疫疫

之い思ひ又思ひ之に見て
むしゝ自分に感じ歎賞す

吉田東洋記念館蔵書

小楠先生小傳

小楠横井先生名は存字は子操通稱平四郎時存は其實名なり小楠は其號なり又沼山と號す（一時長齋の號あり後用ひず）遠祖は北條氏に出つ尾張に住す（尾州横井氏あり其同宗なり）後細川忠興侯（豐前）に仕ふ相繼て世々肥後熊本藩主細川氏の臣たり父諱は大平藩の奉行職たり剛直を以て稱せらる先生は其第二子なり文化六年八月熊本内坪井街の家に生る母永嶺氏稟性厚重にして嚴なり能く兒子を敎育す先生幼にして聰穎往々機敏人を驚かすの言行有り

熊本城外郊に騎射場あり先生年十三騎射を此處に習ふ一日同年の友下津休也（始め久馬と云ふ家職（千）と馬を駢べて射場より歸る途上談偶藩の醫家なり）時事に渉る慨然として澄清の志を吐き他日相共に國事を振興せんと

とを期す是れ即ち經國の志を起せし始めなり

藩の學校を時習館と稱へ寶曆年間に創立し爾來繼續して衰へす先生蚤歳より入校業を受く長するに從て業大に進む藩主屢章服及金幣を賞賜す校内に寄宿舍有り居寮と云ふ俊秀を撰拔し人材を育成す先生も亦其撰に中る遺稿中漢文の存するもの多くは當時の作なり（先生後來文章を作る甚稀なり）然れとも其志す所文字章句の間に非す而して史書を渉獵し好て古今の治亂興亡の迹を見る身其際に遭逢する者の如く議論人意の表に出つ天保九年居寮長となる長岡是容（細川氏三家老の一にして家祿一萬五千石を領し世々藩の執政たり）人と爲り温厚にして識見有り能く士に下る先生と布衣の交りを爲す

天保十年三月藩主の命を以て江戸に遊學す（東遊草は此時の詩稿なり）當時文學汪盛府下碩儒と稱せらるゝ者少からす天下才名の士も亦多く集れり先生此間に交遊し而して水戸藩藤田東湖幕士永野永淑川路某等と最も

親交名聲漸く諸名士の間に藉々たり時に壯齡英氣人を壓す或は時俗に觸るゝものあり藩廳遽に歸國を命す先生命を得て將に程に上らんとす水戸烈公其才名を聞き之れを收用せんと欲す乃ち侍臣藤田東湖をして來て内諭を傳へしむ是より先き先生水戸藩の慷慨自ら負み局量相爭ふの非なるを嘆し屢東湖に語る（藤田氏の宴會に臨み席上賦贈の詩參看す可し）東湖も亦强て辨せす是に至り先生喟然として曰く出處進退自ら道有りと遂に辭して就かす十一年四月國に歸る其江戸に在る僅かに一歲なり

先生既に國に歸り門を閉ち客を謝し堅苦刻勵心を經傳に專らにす家素より貧其居室僅に六疊の蓆壞壁破障竹を編みて椽と爲す而して晨夕水を汲み飯を炊き一家の勞を助く其勤勉人の堪へさる所なり然れとも先生厭色無く亂帙の間に起臥し年の移るを知らさる者の如し此の如きもの殆と四年一日慨然として云吾之れを得たりと此後子弟を敎る其大要に曰く道德は經國安民の本にして而して知識に由て進む（顧に謂ふ先生學識日に進て止ます雖とも殊に身の艱險世の變動に遭逢する毎に必す人の窺測る可

らざる卓見を發しなる人の敎格物致知を以て先きとす己れを修め人を治る內外二途の別無し和漢の儒者或は小廉曲謹を以て道德とし或は博覽强記を以て知識とす苟も事實に當れは漠然として糊塗す以て俗儒と爲る所以なりと而して忠君愛國は先生の天性に出つ是を以て風勵する最も著明にして終世の中に顯はれ門下の士粗得る所の者大槪四大段有り其一は此時なり其二は上國漫遊の後なり其三は開國論を唱へし日なり其四は沼山閑居の時とす人或は其變説を疑ふ者有り因て此に贅す

是故に孔門大學の敎格物致知を以て先きとす己れを修め人を治る內外二途の別無し和漢の儒者或は小廉曲謹を以て道德とし或は博覽强記を以て知識とす苟も事實に當れは漠然として糊塗す以て俗儒と爲る所以なりと而して忠君愛國は先生の天性に出つ是を以て風勵する に義烈節操を以てす故に若し君長を蔑如し廉節を誤り利祿を眷戀し 寵辱に役せらるゝ者は門下に遊ふと能はす又訓詁詞章は棄るに非れ とも必要とせず故に之れを重んじ之れに從事する者門下に來ると稱 なり又當時人を導く頗ぶる嚴正なり是容素より先生と交り厚し而し て或は其嚴正を憚ると有り然れとも先生才を愛し善を容れ一の嘉言 善行有るも喜て措かす是故に俊拔の士着實の人樂て其門に遊ぶ弘化 三年家兄に從て居を相撲街に移し翌年家塾を開く是に於て横井の門 漸く熾なり

是より先き天下の學風大に文藝の末技に流れ治國の要に至りては殆

と措て問はす先生之を慨嘆す當時文學の士も亦先生の學術を忌憚す 時に藩中先生と志趣を一にする者長岡是容荻昌國下津休也元田永孚 の輩有り是容門地最も高し而して藩主文武奬勵の事を委任す是容爲 めに書を作て藩士に示す其文中實學云々の語有り蓋し時病に針する なり是より後横井の門を目して實學黨と呼ぶ是容故有て職を辭す爾 後實學黨を忌む者漸く多し先生年少の子弟を諭して云ふ古人僞學と 呼ばれて以て擯斥責罰を受けし者有り然るに我黨負ふに實學の美稱 を以てし又責罰を蒙らす亦可ならすやと敢て意とせす

嘗て家兄時明重病を受く先生平日友愛太た深し晝夜看護す是より先 き先生既に漢法醫の治方に慊足せす醫福間某なる者あり嘗て業を蘭 人に受く先生之れと交る因て治療を托す其治術の條理有るか爲めな り後醫生の門下に來往する者皆洋法に皈す而して西洋醫術に志有る 者爲めに大に力を得たり是を以て漢法醫輩も亦實學派を忌むに至れ

り

是時先生の聲望稍天下に顯る書を寄せて其起んとを勸むる者あり贊を執て門に來る者有り嘉永二年越前福井藩士三寺三作藩主の命を得て眞儒を四方に求め諸國を漫遊す未た其人を得す偶梁川星巖に逢ひ始めて先生の名を聞く乃ち遂に熊本に來り先生に見へ嘆して曰く斯人なる哉と留て師事す居ること半年餘粗其要領を得て飯る時に天下漸く將に多事ならんとす先生燕臥すること能はす四年上國を巡遊せんと す門生二名を從へ二月程を發し中國を經て畿内に入る到る處各藩の士風民俗及藩政を審視し記して是容に贈る遊歷見聞錄是なり是容見て深く其用意の精到なるを感嘆せり此行海道は尾張に止まり轉して越前に赴く福井藩執政及藩士既に三作の言に依り久く先生を景慕す到るに迨んで最も優待を極む執政某の別墅遊仙樓に館す留ること月餘當時藩の儒員吉田東篁なるものあり朱子學を以て名あり忠愛人を導

く先生太た東篁の志を善す東篁門下の士と共に日に先生の旅館に來會す先生爲めに大學を講す其文字章句の上に非すして大に時務に適切なるを以て衆皆嘆服す由利公正氏の如き負笈隨行（故有て果さすせんと欲）るに至る而して加賀に入り復越前に反る歸途大阪に至り城代土屋采女正が用人大久保要に因て幕府に上書（遺稿無し）し時事を言ふ漫遊中接する所の士多しと雖も特に結交せしは京師の梁川星巖春日讃岐尾張の田宮如雲長州の村田清風等なり星巖時に帷を京師に下し詩を以て鳴る自ら詩に隱ると云ふ懇に先生を都下に留めんとす先生笑て之れを辭し袂を拂て國に歸る同年八月なり

先生既に歸り浩嘆して曰く天下人無しと慨然自任するの志有り是れより先生の體段識見共に高きを加ふ蓋し封建時代の人心たるや着眼其限畫有りて封疆の外に出です天下の事は對岸の火視するのみ大槩皆然り先生甚た其弊習を厭ふ大學の八條目に由りて子弟を諭して曰

く所謂欲明明德於天下云々とは天下の人をして各其聰明を開發せしむるの規摸にして區々一方一隅に止る可らす其規摸大にして任重く國家を治齊し身心を修正する愈切にして誠意格致の學始めて着實なりと云々

五年松平春嶽公曩きに先生漫遊の日面接せざるを憾み人をして學校の制を問はしむ先生乃ち學校問答錄を草して之れに應す春嶽公見て大に悅ぶ遂に聘待の意有り

先生嘗て兵制は武器の發明に從て變するとを論し陸兵問答を著す而して當今西洋の炮術火技の巧妙なるを聞けとも未た其詳悉を得す是より先き藩の炮術家池邊啓太長崎人高島秋帆（高敦と云町年寄なり）に從ひ蘭人に就て火術を研究す幕府の大監察鳥井耀（林大學の實弟なり）が爲めに陷いれられ幕府秋帆を囚ふるに及て池邊も亦江戸に拘致せらる後鳥井譴責せられ秋帆免る而して幕士を訓練し兵制を改むるに至り池邊も亦國に

皈り專ら西洋火術及練兵等を以て藩士を教導す然るに古流の炮術家及兵家者等相共に之れを誹譏し恰も敵視するが如し獨り先生大に悅ぶ門生をして池邊に就て火技兵法を學ばしむ是れより舊炮術家兵家者時の學者及漢法醫輩相共に實學派を疾視すること益甚し

嘉永六年癸丑米國使節水師提督陂理（ペルリ）軍艦を率ひて浦賀に來り國書を呈し通信互市を乞ふ天下騷然朝野を論せす紛々鎖攘の說を爭ふ是より先き先生も亦云ふ鎖國の令出て既に久し民心之れに安んす已むとを得されは開戰も辭せさる所なりと雖とも戰端を開くが如きは應答其當を失ふに因る故に其應答の辭理精詳ならさる可らすと云々時に幕府方さに窮迫水戸烈公を起して政事の大議に參せしむ先生之れを聞き意見を述べて書を藤田東湖に贈る（今其稿無し）藤田氏答書有り（此書も亦所在知らす）七年甲寅九月魯國の使節國書を携へて長崎に來る幕吏川路某其應接の爲めに來崎の事を聞き川路嘗て先生と舊知あるを以て是容舊

主に薦めて内使を命す十月下浣長崎に赴く小河一敏（豊後岡藩の人梁川先生を信ず）偶熊本に來る依て相伴ふ後先生斯然開國の論を明言するに至りて跡絶す隨行す然るに魯艦は再來の期を約して出港し川路西下せす因て先生港尹水野某に面せんと請ふ聽かす乃ち已むを得す夷虜應接大意を著し大要外人に對するに義理禮節を失ふ可らす鎖國は我國祖宗の意に非す今日の事開鎖共に正理公道を以て事に從ふべきを云ふ其論正大堂々當る可らさるの勢有り長崎港尹に因て川路に送致せんとを請ふ港尹之れを受く其送致せしや如何を知らす是れ蓋し開國の論を唱へんとするの端始なり熊本に皈り再ひ書を藤田氏に贈る藤田氏答へす先生の崎陽行中長州吉田松陰熊本に來る先生に面接を得さるを憾む乃ち書を遺して去る數千言幾はくも無くして松陰洋行の志を達するを得す罪を幕府に獲たり故に先生之れに答へす

此年二月小川氏を娶る明年家兄時明病歿嗣子幼なり因て家を承け祿

百五十石を襲受す家益貧なり

此時先生既に粗宇内形勢の實況を察知す曰く天地の氣運萬國の大勢は人爲を以て私す可らざるなりと蓋し其識見の發する宇内の眞理公道と天下の大勢上とに因て斷然開國の論を唱ふるものなり是れより門人交友の中鎖攘に拘泥して往々分離する者有り先生顧みず

安政二年四月居を城東沼山津村に移し閑居自ら樂む依て沼山と號す其書齋を四時軒と云ふ門生各土を擔ひ木を運び塾舍を建設す沼山の居城を距る二里許曠原を背にす大澤を面にす山水清遠風光頗る佳なり而して過客も亦稀少なり或は釣を水畔に垂れ或は筇を郊村に曳く當世に意無き者の如く優遊閑雅以て日を竟ふ此月肥前の人田中虎六來り連日談話深く先生の卓識に服す目して渭濱の翁といふ（田中記する所の四時軒の文中虎六に明かなり）虎六西洋大小銃砲の製造及兵制を說く稍詳明なり又泰西各國の政治を辨する略其綱槩を得たり先生甚た喜ぶ後海國圖誌を得

て之を讀み其平生蘊蓄する所を徴し益自ら信す時に勝義邦氏長崎に在て海軍術を修む偶先生の門生某長崎に遊ぶ者あり勝氏之れに自家意見の書を付して贈る是勝氏先生と交るの始めなり

始め先生江戸より歸り大塚退野（寶暦年間同藩の人）の遺稿に因て得る所多しとす退野の學朝鮮李退溪に出づ退溪の學伊洛を宗とす先生も亦伊洛の學を信す後伊洛の諸賢經綸に乏しきを疑ふ而後遡て孔孟を信し直ちに堯舜を祖述す終に大に發明する所有て後來只天と說くのみ沼山閑居の雜誌十首を作り其志を述ぶ言々皆千古の眞理を喝破し句々能く萬斛の感慨を寄す識見超群氣宇宙を呑む是より先き門人の敎育も亦一變して只其性質の長する所に從ひ循々として道に入らしむ規則儀文を以て之れを拘束せす而して自立自行敢て規矩の外に出てざらしむ常に曰く規律は死物のみ死物を以て活人を御す或は之を外面に行はしむべし以て隱微の間に行はしむべからす或は之を門内に行はし

春嶽公の歌

盛なる心にそゝけひらけたる君が誠を春雨にして

むべし以て門外に行はしむべからすと

先生沼山に閑居すと雖も名聲隱然朝野を動し沼山の名天下に重し而して越前春嶽公最も先生を知る四年其臣村田氏壽を遣して起居を問はしめ贈るに國歌一章を以てす亦聘待の意を言ふ先生起んと欲す或は其二君に仕ふるの嫌有るを譏る先生笑て曰く今日の事豈此陋習に拘はる可んやと翌年三月藩主の命を奉して越前に赴く時會ま春嶽公幕府の譴責を受け府下に籠居す遠く命を藩地に傳へて待つに上賓の禮を以てし班執政老職の上に在り常に機務の顧問に當る執政重臣以下藩士皆弟子の禮を執る繼嗣茂昭侯亦先生を尊信す六年正月國に歸る爾來由利氏青山氏其他諸子交々沼山に來る而して先生も亦是より屢越前に來往す越前の俗形容を重んじ着實の風に乏し故に表飾備具するも仁愛の實を欠くの病を免れす施政も亦其憾無きと能はす先生到るに迨んで情勢順に轉し一藩翕然として針路を着實に取り上下公

平に向ふ文久元年正月荻昌國元田永孚等に與へし書あり以て當時の事情を悉くせり是時國是三論を議定す（中根雪江之を記す）曰く富國曰く强兵曰く士道其富國論の大要は人生交易の理を擴めて萬國通商の利を說き遊民を減して農工の業を振起するの道を辨し天下公共の大道に從て開國の大謨を立るに在るを論す其强兵論の大要は銅鐵を開き鐵山を起し其利を以て軍艦及器械を購入し以て海軍を興す可きを論す其士道論の大要は文武二致無きを論す是に於て越前の國是始めて定る

文久二年六月四たび越前に赴く未た至らす途に春嶽公の命を得轉して直ちに江戸に之く此時春嶽公幕府の惣裁職の命を受くるに際す是を以て先生國是七條を上聞す其中に將軍上洛諸侯の室家を封土に還す等の條項有り大久保一翁（時に越中守と云ふ將軍の側衆頭取たり）之を聞き大に驚き力を極めて其議を拒む先生之を聞き乃ち大久保氏の邸に往きて面議す氏領會の意無く顏色を變し議論澁滯す先生曰く若し諸侯告げすして

室家を國に歸す者有らば幕府之れを禁止するの力有りや如何と大久保氏渙然として悟る此後深く先生を敬信せりと云ふ而して幕府先生を登用せんと欲し春嶽公をして意を致さしむ先生之を固辭す幕府强る能はす事止を得たり

此時浮浪暴激の徒尤先生を指目す一夜藩士某と一樓上に閑話す兇徒有り白刃を提けて階を上り來る先生卒然立て賊の傍側より身を跳らして階を下る賊驟刺に遑まあらす直に進て某を刺す先生以て免るを得たり先生乃ち江戸を辭し越前に赴る

三年八月熊本に歸る元治元年藩廳先生江戸に於て刺客に抗せざるを遐罰して世祿を收沒す先生心を時事に留め意に介せさる者の如し時に天下の形勢愈切迫なり薩の藩士某々又坂本龍馬等が如き往來中必す沼山の閑居を訪ひ其意見を諮問する者多し

先生嘗て云ふ我邦海軍の經畫尤も緩くす可らすと是に到りて乃ち海

軍問答錄を著し島津久光公の京都に在るに贈呈す又先生二姪有り一は左平太一は太平と云ふ始め勝氏に托して海軍を學ばしむ後米國に遊はしめんと欲す然れとも其國禁未た解けざるを憚る後藩主の許を得て乃ち姓名を伊勢と改め長崎より米船に搭し米國に赴かしむ時慶應二年なり

三年德川氏表を上て將軍職を辭し大權を奉還す先生報を得て云ふ事茲に至る天下將に定まらんとすと明治元年三月徵士の命を蒙り京師に出つ制度局の判事に任す幾ばくも無くして參與に拜す從四位下に叙す此時先生年齒最も高く太政官中の老先生たり上下に敬重せらる先生經國の志將に大に伸んとす然るに天先生を慶せす病魔頻りに臻り大に事に任する能はす嘗て病篤し門人に口授して遺表を草せしむ而して病稍癒ゆ上つらずして止む朝廷將に顧問に任せんとす先生も亦其任に當らんと欲す二年正月五日退朝途寺町を過く兇徒十二三名

短銃を放て突然與に迫り先生を刄せんとす先生與を排して出短刀を以て抗す病餘衰憊防遏すると能はす終に賊刄に斃る勅使來て　皇上痛悼の聖意を傳へ而して金幣若干を賜ふ門生從僕の負傷する者亦醫療金幣等の恩賜有り

先生身材中人に及ばすと雖も容貌魁岸眼光烱々一見して其偉丈夫たるを知るべし性質聰明にして思想に富む加ふるに非凡の識見を以て す氣宇豁達神氣爽快困迫の中に在りと雖も憂色無し人に接するに昗域を設けす疇昔曾て我を敵視する者と雖も來れば即ち釋然たり音吐朗々として談論風を生す人を敎るや繩墨に流れす燕談閑話の中能く其情を盡くし其藴を吐しめ其悪くさゝる所を導き足らさる所を繹ぬるの端緒を得せしむ其怒るときは霹靂一聲心膽をして冷やかなしらむると雖も一雲雨過て青天を瞻るが如く寸毫も迹を留めす又事を他に爲さしむるや人をして其指示に出るを忘れ其自ら思慮し得たる所

を爲すか如きの感有らしむ又平素親に事ふると尤も謹み人を憫れむと尤も厚し然れとも議論操行一世潮流の外に出るを以て合するもの稀れにして生涯殆んと坎坷の間に在り晩年家人子弟を戒めて曰く吾常に世と趣向を異にし他の指目する所となる其免れて今日有るは蓋し天幸のみ假令吾今日非命に終るとも敢て或は復仇を謀る勿れと言遂に識を爲す

始め小川氏を娶り男子を擧く數月にして母子共に歿す後又矢島氏を娶り一男一女を生む男を時雄と云ふ從兄左平太の跡を承け家を繼く（左平太波航の際假りに伊勢佐太郎と稱す先生沒する時尚ほ海外にあり て先生の後を襲く歸朝の後亦た横非に復せす明治二十二年五月横非に復姓）女美也海老名氏に嫁す共に存す

先生の遺骸は西京南禪寺の境内天授菴中の墓地に葬る

先生の著書今遺稿の存するもの載せて本篇に在り南朝史は江戸遊學歸鄉後の起稿なり稿を脫せすして止む其所以を知らす

先生の遺事記す可き者甚た多し然れとも時勢多難に際し交際の人多くは東馳西走而して先生も亦逸居に遑まあらす往復書簡の類の如きも多く散失し今や其詳悉を得るに由し無し故に僅に十の一二を錄し讀者をして只其綱槩を知らしめんと欲するのみ

明治二十二年三月　　門人謹識

小楠遺稿目錄

雜著

學校問答……一頁
文武一途之說……一〇頁
夷虜應接大意……一五頁
陸兵問答……二一頁
海軍問答書……二八頁
國是三論
富國論……四四頁

強兵論……六四頁
士道……七七頁
或問……九〇頁
海外の形勢を説き併せて國防を論ず……九三頁
處時變議……九七頁

建白類

幕府に建言七條……一〇二頁
越前侯に呈する書……一〇三頁
朋黨之病を建言す……一〇四頁
國是十二條……一〇六頁
春嶽公に建白……一〇八頁
七條……一一三頁
小楠翁手錄日記抜萃……一一五頁

四條……一一六頁

書翰類

中根雪江日錄採記……三四六頁

語錄

沼山閑話……三七六頁
沼山對話……三八九頁
遊學雜志……四一五頁
遊歷聞見書……四三三頁
講義類……四七〇頁
文章類……四七九頁

詩類

東游小稿……五〇四頁
小楠堂詩艸……五二九頁

小楠遺稿

雜著

學校問答　嘉永五年著

近世各藩明君ノ聞ヘアル者先ツ施政ノ第一番ハ多ク學校ニ在リ時ニ越前松平春岳公モ亦學校ヲ盛大ナラシメントスルノ志趣有リテ人ヲシテ先生ニ其制ヲ問ハシム依テ起草シテ應セシモノナリ

問云政事の根本は人才を生育し風俗を敦するに有之候得者學校を興し候は第一の政にて候や

答云和漢古今明君出給ひては必先學校を興し給ふ事にて候然るに其跡に就て見候に學校にて出類の人才出候ためし無之況是より教化行はれ風俗敦く相成候事見へ不申先漢土にて見候に漢唐宋明の賢人君子と被稱候人大學生より被出候は無之候唐太宗大學を興し生徒八千人の夥敷を被集候得共此八千人の中より壹人の人才出不申徒に盛な

る虚名に歸し申候且當今天下列藩何方も學校無之所は無之候然に章句文字をもてはやし候迄の學校にて是又一向人才の出候勢無之候是其跡形を以て見る事にて其然るゆゑんは嚴斗有之事にて深く考へすんはあるべからす候

「和漢古今學校の跡形は然る事に候然るに是は學問と政事と二つに離れ候より學校は讀書所に相成無用の俗學に歸し候今明君出給ひて此弊習を深くしろしめし學政一致の道に心を置給ひて學校を興し人才を生育し風俗を敦ふせんと志し給はゝ然るへき事には無之候哉

此了簡一通り聞へ候得共深く其本を考へさる事に存候先考へて御覽候得大和にても漢土にても古も今も學校を興し給ふは其國其天下の明君の時にては無之候や此明君の興し給ふ學校にて候得は初より章句文字無用の學問に成行候は深く恐れ戒められ必學政一致に志し人

才生育に心を留め給ふ事に候然るに其學政一致と申す心は人才を生育し政事の有用に用ひんとの心にて候此政事の有用に用んとの心直樣一統の心にとをり候て諸生孰れも有用の人才に成らんと競立着實爲己の本を忘れ政事運用の末に馳込み其弊互に忌諱娟疾を生し甚敷は學校は喧嘩場所に相成候是則人才の利政と申者にて人才を生育せんとして却て人材を害ひ風化を敦せんとして却て風化を壞り其末あつものにこり人才をいやかり候心に相成果は章句文字の俗儒の學校に成行候は勢の止むへからさる所にて候

然は學政一致の心は非なる事に候哉

「秦漢以來此道明かなり不申天下古今賢知も愚夫も押ならし心得候は學問と申は修己の事のみにて書を讀み其義を講し篤實謹行にして心を政事に留めす獨自ら修養するを以て眞の儒者と稱し經を講し詩を談し文詩に達する人を學者と唱へ申候扨又才識器量有て人情に達し

世務に通し候人を經濟有用の人才と云ひ簿書に習熟し貨財に通し巧者にて文筆達者なるを能き役人と心得候是學者は經濟の用に達せす經濟者は修身の本を失ひ本末躰用相兼る事不能候漢の宣帝の漢家自ら王霸を雜へ用るの説も其世の儒者躰有て用無きより政事は霸者功利の人被用候今日の人心誰に承り候ても此心得にて分明に學政二ッに離れ申候此二ッに離れ候學政を一致にせんと欲し候は一通尤に聞へ候へ共元來其元なくして治を求るの心急に有之前に申通り人才を生育し有用に立んと欲する心主に成り候て其實は一致にて無之候是即人才の利政に相成候所以にして古今明君の通病にて有之候

學政一致ならさるのくるひ承り候然は其一致なる所以の筋は如何に候哉

事新敷き申事なから天地の間唯是一理にて候得は人間の有用千差萬變無限候得共其歸宿は心の一ッにて候去れは此心を本として推て人

に及ひ萬事の政に相成本末躰用彼是のかわりは候得共二ッに離れ候筋にては無之候此二ッに離れさるが一本より萬殊に渉り萬殊より一本に歸し候道理にて候得は政事と申せは直に修己に歸し修己は即政事に推し及し修己治人の一治に行われ候處は唯是學問にて有之候其故に三代の際道行われ候時は君よりは臣を戒め臣よりは君を儆め君臣互に其非心を正し夫より萬事の政に推し及し朝庭の間欽哉戒哉念哉懋哉都兪吁咨の聲のみ有之候是唯朝庭の間のみにて無之父子兄弟夫婦の間互に善を勸め過を救ひ天下政事の得失にも及ひ候は是又講學の道一家閨門の内に行れ候上如此講學行れ其勢ひ下に移り國天下を擧て人々家々に講學行はれ其至りは比屋可封に相成候是其分を申せは君臣父子夫婦にて候へ共道の行われ候所は朋友講習の情誼にて所謂學政一致三本なきと申は此にて有之候後世に明君と被稱候人も父子兄弟夫婦の間種々彝倫の亂を生し候のみならす君臣儆戒之道行

われず朝庭は唯政事の得失を議する所に相成候是則其本なくして政事の末を以て國天下を治んとする霸術功利の政にて候此心にて學校を興し候故前條の通に弊害を生し候は必然の勢にて怪むに足らす候

然は學校は興さゝれ共宜敷事に候哉

學校は政事の根本にて候得は元より起さゝれば叶わさる事に候國天下に學校無之時は彝倫綱常何を以て立可申哉人才志氣何を以て養ひ可申哉風教治化何を以て行れ可申哉人々各見る所を是とし候得は君子小人の爭のみならす君子の人にして互に相容れす朋黨を立流派を分ち終には國天下の大患と相成候ためし和漢古今歴々として不少候況や後世は種々の異端邪説有之天資の高き人といへ共其教習に惑わされ身心を誤り人道を害ひ候もの不少是皆天理自然學術一定の學校無之故に候然れは道を知り給ふ明君出給ひては必先一家閨門の内より講學行われ朝廷の間君臣儆戒の道相立政事是より出て所謂學政一

致の根本既に相立候上は必す學校を興し君臣是にて講學致すへき事に候抑此學校と申は彝倫綱常を明にし修己治人天理自然學術一定の學校にて候得は此に出て學ふ者は重き太夫の身を云へからす年老ひ身の衰へたるを云ふへからす有司職務の繁多を云ふへからす武人不文の暗きを云ふへからす上は君公を初として太夫士の子弟に至る迄暇まあれば打まじはりて學を講し或は人々心身の病痛を儆戒し或は當時の人情政事の得失を討論し或は異端邪説詞章記誦の非を辨明し或は讀書會業經史の義を講習し德義を養ひ知識を明かにするを本意と致し朝廷の講學と本より二途にて無之候唯朝廷は職掌ある人にかきり學校は貴賤老少を分たす學を講する所に候得は學校は朝廷の出會所と申心にて是則學政一致成る所以にて有之候

教官の撰如何なる人にて可然候哉

學校の風習善となるも悪くなるも教官の身に有之候得は其人の撰み

尤以大切に候此に二りの人有之候一人は智識明かに心術正しく候へ共經學詩文の藝に達不申候一人は篤實謹行に候へ共智識明かならず乍然經學詩文の藝は格別に有之候大凡の心にては前の人に側用人奉行等の役人の撰ひに入り後の人を能き教授先生と申候是即躰有て用なきを儒者と心得候後世人心のくるひにて其勢記誦詞章の學校に成らさる事不能候一藩教授先生と被仰候人智識明に心術正しく無之候て何を以て人の神知を開き人の德義を磨き風俗の正しきを得せしめ可申哉譬へ文藝は無之候共前の人にて無之候では教義の道は行れ不申況や知識明かに心術正しく此道の大旨を會得致し候人聖賢の書一通讀得さるは有之間敷候然るにこの人物は一國第一等の人にて一兩人の外は有之間敷學職に用ひ候得は側用人奉行の要路に人を欠の憂ひ有之候夫側用人奉行教授の三職は元來一躰にて人々をして司らしむれば自然に一致ならさる勢ありて其末必す弊害を生する道理にて

候故に此三職は必一人をして兼へ司らしむれば宮中府中學政一致に相成情義能通し隔絶の憂無之のみならす學校の勢ひ自然に重相成可申候

學校の設は如何にして可宜哉

學校の設聖堂あり講堂あり（君公以下諸生に至迄講學所あり）居寮あり（俊秀な撰ひ夜白此に詰て修行せ）句讀所習書所あり算學天文所有り武藝所あり（鉄槍一人に弓馬炮術等の師各稽古所な）（興へ日々に出て稽古せしむ）此に國中の士人朝より暮に至り此學校に集り文武の道を講せしむ教官の設は惣教あり（家老或は一門等の大身の内其人を撰て學校の政を司らしむ）（是則前條の人物にて文武訓導有り教授を助て諸生を教養す）（りを分たす惣へ司らしむ）書師句讀師有り大抵此等の設にて委しき事は列藩學校の制度を斟酌して行ふ可き事に候（關西には長州の制度尤宜しきを得候）唯場所の撰は朝廷に引續設けされは便利ならす候君公も左右の人迄被召具て日々に出給ひ太夫以下の人も暫の暇にも出席し講學致し候が尤學校の本意にて有之候

右問答の本意歸宿は人君の一心に關係致し君となり師となり給ふの御身にて無之候ては如何に制度の宜きを得候共忽ち後世の學校に相成其益無御座候然れは學校の盛衰は君上の一心に有之其他は論に不及候

嘉永五年三月　　横井時存書

文武一途の說　嘉永六年著

和漢古今儒者ト武人ト全ク區域ヲ別ニシ人心ノ聰明ヲ蔽ギルノ通病ヲ醒悟シタル書ナリ越藩村田氏壽氏ニ贈ルノ書翰參看スベシ

有文備者必有武備と申して古の聖賢は大英雄大豪傑にて在ましけり禹の洪水を治め玉ふに手足たこを生する程に自ら働き成湯伊尹文武周公は雨に浴し風に櫛り自干戈を執天下の亂を鎭玉ひしは如何なる

英雄豪傑の業なるそや孔子孟子の時に用られ玉はゞ天下の亂臣賊子を誅し四海の叛亂を平けいかめしき業思やられ侍る朱子曰有豪傑而不聖賢者未有聖賢而不豪傑也此言聖賢の心術を盡し又限りなき感慨の心を寓しぬ抑後の世に成りては文武兩端に分れ眞儒君子と稱せらるゝ人も武事に疎く撥亂反正の大事を成すこと能はす去れは四海波立ぬる時そ干戈を執り三軍を指揮し天下の亂を鎭は別に其人ありて英雄豪傑のなす業となりて世の儒者の道は治亂常變に通し天下有用の道とは云ふ可からす其上治れる世なれとも武事弱り士氣衰て何を以て其治を保んや是必亂に趣く勢にて和漢古今亡國のためし歷々として明白なれは武は唯亂を鎭の道と思ふは甚た愚かなる事ならすやしかはあれ共武の一途を以て人の道と心得治にも亂にも是を以て國を治めんと欲するは其弊更に甚しく云ふ可からさるの禍を生する事必定なり朱子陳龍川に告る言に云眞正大英雄人却從戰々競々臨深履

薄處傲將出來若是氣血麁豪却一點使不著也是は龍川が其世の衰弱學者の事を成に足らさる弊習を見て漢唐以來の英雄豪傑を以て自ら任し却て朱子の學を迂濶無用に付しより角く頂門の一鍼を下し戒られたる言なり熟々當今天下の勢を見るに太平殆んと三百年に垂として綱紀の陵夷民俗の傾廢は申も愚かなれ士氣の衰弊に至りては我邦往古以來今日より甚しきは無之彼南宋の衰弱は同病相憐とも云ふへけれ況又洋夷の惡氣計り難きの憂ひ迫りたるは又彼の金虜の勢强大なると同し然るに學者たる者文武一途の道に志さす熟々時勢の有樣をなかめやりて是を救ふの見識力量なし是に於て世を憂るの人傑出る時は一切學者を以て迂濶無用と押片付專ら武の一途を以て國を起さんと欲するは龍川か見と符節を合せすして同し此說行はるゝ時は譬は激劑を以て病毒を討つか如し一旦に士氣を張り一旦に奇功奏るの勢あるは必定なれ共元來仁義忠誠の心術を磨く正心誠意の上より推

し本き來らされは其弊忽ちに生し或は客氣麁暴の手荒き風とも成り或は權變功利の拙き術とも流れて其末終に如何とも成し難き勢に落入るは銳に懸て見るか如し去れは道は體用本末文武一途に行るゝに非れは眞の道とは云ふ可からす苟も眞正の道を學ひ天下國家の大憂を抱くものは仁義忠誠の心術を磨き一點氣血の麁暴に馳せす小心謹畏深く事を慮り必ず中正至當の理を得んと欲するは固より申にも不及劒槍炮馬の業は此の武士の身の職分なれは力を極て習錬し或は山野に狩りし或は川海に漁り雨に浴し風に櫛り筋骨を逞ふし心體を健になす業は日として怠らす月として忘れす鬼取り拉く武夫の矢竹心の一筋なるは古の武士にも劣らす又彼三軍を指揮し夷賊を齏粉にする兵の法を究て百勝の道を得て亂を鎭め治を致す英雄豪傑の事業は尤我か學術の一大事なれは元龜天正の弓矢の道を本にして彼の西洋の夷賊等かもてはやす兵器陣法に至るまて具に其理を究短を捨て長

を取り習熟心得するに非されは聖賢の道を學ふの儒者とは云ふ可からす司馬德操の云儒生俗士何識時務識時務在俊傑と此の俊傑なるものを古今學者か外樣に見なせはこそ儒生俗士と並へ稱して迂濶無用とは識らるゝなれ諸葛武侯は草廬の中に在りて天下三分の大略を定て用ひらるゝに及て果して其言に背かす朱子平生の義氣天下の人心を感動し尤も兵事に分曉なるは其書を見て明かなり舉て三軍の司命たらは樂毅諸葛の兵たるもの誰か疑を容る可けんや況や韓兵は申に及はん中興恢復の大業鋭に懸て見よりも明かなり是其平生習學の力にして所謂眞正の大英雄人とは武侯朱子の外に又誰ありてそ稱す可きや然れは朱子を學ふものゝ武事に疎く治亂常變に通せさるは腐儒なれ俗士なれ迂濶無用の學者にて今の德操たらん人の笑ひを取るは此學の大なる耻ならすや記して同學の諸君子に告くと云爾

嘉永六年正月　　横井時存拜

夷虜應接大意　嘉永七年著

時ニ天下鎖攘ノ論紛々勢其止ル所ヲ知ラス幕吏川路某魯國使節應接ノ爲メニ來崎ノ報有リ先生川路ト舊知タルヲ以テ藩主內使ヲ命ス先生因テ其所思ヲ談セント欲セシモ魯艦再來ヲ期シテ出港シ川路モ亦來ラス已ムヿヲ得ス長崎客舍ニ於テ其綱概ヲ記シテ川路ニ贈リシモノナリ

我國の萬國に勝れ世界にて君子國とも稱せらるゝは天地の心を躰し仁義を重んするを以て也されは亞墨利加魯西亞の使節に應接するも只此天地仁義の大道を貫くの條理を得るに有り此條理貫かされは和すれは國躰を損ひ戰は破れ二ツのものゝ勢眞に顯然たるは更に又云に不及事也凡我國の外夷に處するの國是たるや有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二ツ也有道無道を分たす一切拒絶するは天

地公共の實理に暗して遂に信義を萬國に失ふに至るもの必然の理也然るに其有道と云るは唯我國に信義を失なはさる國のみを言ことにあらすして自餘の國に於るも又信義を守り侵犯暴惡の所行なく天地の心に背かさるの國を云るとにして此等の國ありて我に通信交易を望むに我是を絶て拒絶するの道理あるへきや我

祖宗此理を明らめ玉ひ唐蘭の二國既に交易を許さるゝと云へ共萬國此理に暗してアメリカの書翰にも鎖國を以我國是の道也と述たるは全く我國是の大道を知らさる故也只外國のみならす我邦人も又鎖國を以て國躰也とのみをもひ信義の萬國に貫くと貫さるとの天地仁義を宗とする國是の大道を知さるよりして我の信義を失ひ彼か忿怒の心を起さしめ大に國躰を誤るに到て又如何んぞ是を救ふの術あるへきや然は今彼に答には有道を許し無道を絶ち國是の大本として一切鎖國するの道にはあらさる事を明に示し然して後彼の渡來のさま通

信通商の望を許さゝれは軍艦を以て來り迫るの由を述且は妄に浦賀に乘入樣々の無禮を働き一切我法度を守らさるの無禮無道を責如此の國は痛く禁絶するの大法なる事を諭し聞せんに彼國叩頭して是を陳謝じ前非を改め通信通商を乞こと必然也是朝に無禮をなし夕に改ると云へとも其實なくして其辭のみなるよしを以て又是を拒絶し果して我信義に服し罪を改めんとならは後來其信義世界萬國に貫徹する時を待て通信通商を議せんとならは彼何の言葉ありてか兵事を發する事を得んや是に於ても彼罪に不服強て兵事を起ときは彼曲我直必死を以て戰わんに百勝既に顯然たり何の懼るゝ事か是あらんや魯西亞の陳する所未知と云へ共察する處アメリカとは情を異にすへし如何に異にするといへとも是に答んに先我アメリカを拒絶するの大義理を述若我を援けん抔との詞ありとも深く力を他國に借るの道にあらさる事を諭す時は彼必其國の有道信義アメリカの類にあらさる

事をのへて通信を乞へし於是我又彼に答んには我國既にアメリカに事有て彼或は軍艦を以て來らは痛く血戰し其罪惡を懲さんとするの時なり然るに今魯西亞と通せは世界萬國我國を不勇と唱ん事必然の勢なり是我國の深く恥る所なれは今に至りて通信通商共に許すへきの日にあらす是を求んとならは後年其時ありて是を議する事あるへしと答んに彼又何の辭ありて再陳する事のあるへきや凡天地の間は只是道理のあるあり道理を以て諭さんには夷狄禽獸といへとも服せさる事不能也今の世にあたり外虜に接する事を談するもの大抵四等あり我宴安に溺れ彼威强に屈し和議を唱ふるものを最下等とす鎖國の舊習に泥み理非を分たす一切に外國を拒絶して必戰せんとするは宴安に溺るゝの徒に增るといへとも天地自然の道理を不知して必敗を取るの徒也又彼か無禮を惡み彼と戰んと欲すれとも我國貳百五十年の泰平に天下之士氣頽廢して曾驕兵たるを憂へ暫く屈して彼と和

し其間暇を以士氣を張り國を强して後彼と戰わんとのみ思ふは彼是の國情を詳かにし利害の實を得たるに似たると云へとも其實は天地の大義に暗きのみならす利害に於ても亦決して其見る處の如くなる事不能なり廟堂假初にも彼と和する心ある時は天下の人心彌益惰弛に趣士氣何れの日か振起すへき器械に到りても決して整の日あるへからす三令五申其益無きのみならす天下遂に瓦解土崩の勢をなす事必然なり然れは今日に當りて必戰の計を決して幕府列國材傑の人を擧用るの道最第一の緊要とす其人擧る時は其政改り天下の人心大義の有事を知り士氣一新するも瞬息の間に有て今日之驕兵忽變して精兵となる事猶手を復すに異ならす戰の勝敗は砲熕器械のみにあらすして正義の天地に貫と不貫と人心の振と不振とにあり況や人心振時は器械砲熕も亦隨て實備するに於てをや百夷千蠻何の恐れかあらん是利害得失の見易きもの也故に我は戰鬪必死を宗とし天地の大義を

奉して彼に應接するの道今日の一義にあらすや我國毫も彼か強梁を恐れす大義を明かにして彼を拒絶せは夷虜不戰して畏服せさる事能はさる也内を治め外を固くし軍艦守備を整へ或は通信通商のさまの事は別に論する旨ありて爰に混せす今只彼に應接するの大義を述るのみ也其述る所といへとも偏に應接の大綱領にして其條目に到りては機に臨み變に應し綱領を擴充して其節に當るは全く其人に有り爰に於て應接の人材尤選はさるへからす夫天地有生の仁心を宗とする國は我も又是をいれ不信不義の國は天地神明と共に是を威罰するの大義を海外萬國に示し内天下の士氣を振起して器械砲艦漸を以全く備るに至りては萬國醜虜我正義に服從せさる事能はさるもの何の疑かあるへきそや聊部意を述て見る人に見せんと云ふ

嘉永七寅年十月下浣　　横井時存　識

陸兵問答　安政二年著

始メ兵法問答或ハ兵學問答ト題ス後海軍問答ノ著有ルニ及テ陸兵問答ト改ム

蓋シ四洋ノ銃炮輸入シテハ兵制必ラス一變セザルベカラス然ルニ當時軍學者流及兵備ニ關スル者多ク古制ニ拘泥シテ遽ニ變シ難キノ勢有ルカ爲メニ起草セシモノナリ

西洋の長技は銃炮にして本邦の長技は刀鎗に有之候彼是長短ありて相兼る不能は自然の勢とも可申候哉然ば方今西洋の銃炮盛に行れ其弊刀鎗の利用を失ふに至るべく候夫本邦の萬國に勝て武勇逞しきは全血戰の利に候へば必しも彼か長を取り用るには及申間敷我か長を以て彼か短を挫き候てこそ本邦の武勇とも申べく候夷變以來天下紛々として兵を論する事に相成西洋之銃炮を主とするは本邦の血戰を廢し本邦の血戰を主とするは西洋の銃炮を斥け相互に難辨し各一偏に執着いたし必竟太平の心を以て亂世を見候故にて

有之候亂世に生候へば兵器程武士の身に切成は無之此器か勝れて宜しければ直に一統に行れ異議申もの無之候源平より南北の亂迄は弓馬長刀太刀を用ひ候處太平の變りにて可見候源平より南北の亂迄は弓馬長刀太刀を用ひ候處太平記に鎗と云ふ器二三ケ所に相見えいまだ一統には行れす應仁の亂比より漸々皆鎗を用るとに相成高名の言葉にも一番鎗と唱申候此鎗は元來古の兵器にて有之候或人の説に鎗は矛より出たりと云ひ又長刀より變たりとも云へ共是皆外國の器たるを嫌て例の太平の人の云ふとにて不可信候是よりして騎戰廢して歩戰と相成候扨又弘治之比にて候哉西洋より銃炮渡り其器の猛烈なる勝て利用なれは誰唱るとも無く一時に天下に行れて本朝古來よりの弓矢も又廢するに至り候源平前後事弓馬を主とし其弓馬の法は其比の踏記錄に相見え馬は向を下げ駈引進退を主といたし或は大河を渡し或は險阻へ乘り上乘り下し候事に有之候弓射力之強きを主といたし遠矢さし矢矢鋒早の業にて有之候處騎射廢候より大坪某なるもの東山代出候て天下の馬法一變いたし當今の馬場乘りと相成弓は銃炮行れるより廢候て專品惡り形樣を主といたし古法地を拂ひ弓も馬も戯場の實用にて無之武士の弄ひ物と相成申候鎗も鐵炮も皆外國の器なれ共勝て利用なれば直に天下に行れて古來の兵器も廢するに至り一人の異議無きは亂世の人利害身に

切成る故にて有之候本國にては鐵炮渡り候而無程太平に相成り候故其術たる火矢花火烏打角打等の弄ひものと相成銃炮の實用開け不申候へ共西洋は列國戰爭を事といたし其術益々明に相成り戰爭の器是に過たる用器は無之候へ共太平の人心身に切ならす候故種々に難病を生し拒絶いたし候事に有之候

西洋銃器を取り用は尤に聞候乍去我か傳來の陣法を廢し彼か銃隊に變するには不及事に候

總して陣法は兵器に因て變する事にて候源平の昔騎戰行候時は一手二手と手分致し候迄の備立にて行伍の列も無之相懸り勝敗を決するとにて有之候鎗行候より騎戰廢し歩戰と相成り初て行伍の列も出來申候扨又鐵砲渡り候て銃隊も出來候而銃隊を前に備へ刀鎗隊を後にいたし敵合に成れは互に鐵砲を放ち扨血戰を初るとに相成候去れは本邦の陣法鎗起りて一變し鐵砲初りて再變し其兵器に因て變するは

自然の勢にて有之候乍然此頃迄は專血戰を主といたし候故當時の諺の剛の者には鐵砲は當らぬものと唱へ有名の武士は此器を用るを屑といたし不申候は必竟銃砲の術いまた開け不申候より其銃隊も紀律節制の法則立さる故にて有之候夫血戰を主とすれは刀鎗の利刃を以て切込みつき込乘り入り乘り破ることにて必しも紀律節制ならされは敵合に臨み隊伍混雜いたし丸を放と不能譬へ放候も犬抵越し矢と相成り再ひ矢込出來不申して利用を失ひ候は只今の操打調練にて可見事に候況哉現實の物場に臨ては物の用に立不申候彼の剛の者には當らぬと云ふも必しも義張りたる言葉にて無之果して然る事と聞え候西洋諸國は前に申通り其術次第に開今日に至りて如彼嚴密節制の陣法と相成り其利用雲泥の替りにて有之候は西洋砲家者既に知る處にて申に不及候去れは其器を用れは必す其銃隊の法に變せさると不能は自然の勢にて有之候

然らは銃隊のみ變して士隊は是迄の備立にて可宜哉

凡陣法は兵器に因て變するのみならず又敵の兵器と備立とに因て變することにて有之候本邦太平となりて兵を論する者一國相互の敵合の心得にて候故大抵甲越の戰法を祖述し專ら血戰を主としたる備立にて有之候（外國を相手として兵を論したるは林子平に始り物茂卿さいへ共此見識は無之候）當今に至りては敵は西洋諸州にて彼等か節制の銃隊に我傳來の陣法にて戰はんに先手の銃隊敗るゝ時は刀鎗の士隊其彈丸に當りうちすくめらるゝは必定にて大阪の役木村長門か一軍井伊家の銃隊に競ひ愚物敢軍と成りたるか如き士隊にて銃隊に懸り敗を取りたる例し少からす況や當今の銃隊は總て輕卒を用ふることにて是を頼みに敵の間合に乘り入らんと欲するは極て危き事ならすや是士隊も銃隊に變せされば叶はさる事にて有之候

銃炮と刀は一人の身に備られ候得共鎗と銃炮は用ひられす候士隊

を銃隊に變し候へば鎗は捨り候にて有之候哉

兵器用の各々長短ありて相兼る事不能候銃炮は間の外に利ありて血戰用のを爲さず刀鎗は血戰の利にして間の外に用無し弓矢は騎馬に用べくして鎗は歩戰ならされは用ひられず候夫故に西洋にてボダマルテ製の劔筒一統に行れ敵合に成れは間の外にて打放し直につき懸りて血戰をいたすとにて候へ共劔の製造利又ならす候故其鎗法又拙くして我か鎗術の精練なるには比すへくも無之候西洋戰爭絵巻物を見て其鎗法の拙き事相知れ候且我か刀鎗の術の精練なるは彼等も又深く賞嘆する事にて和蘭よりは刀鎗の術修行さして少年之者連越長崎にて稽古いたし候　去れは我か利刃の鎗を以て銃劔とし精練の法を以て遣ひ候得は是に過たる便利の器は無之候是彼か劔筒を我に用れは十分の利に候へ共方今西洋銃隊を用に大抵劔を用ひさるはいまた實用の理を究め得さる故にて有之候然に是は相懸り之野戰を云とにて時に取りては鎗も又用る處あり て一概に廢すると云にはあらす候

西洋銃隊に變すへきは一々相聞候乍去當時西洋陣法を用候に既に刀鎗を廢するの弊習有之專銃隊にし銃炮を主といたし候へば自然に血戰の本意を失ふの患は無之候哉

此疑一と通りより見候ては尤に相聞候へ共いまた深く實理を究ざる節にて有之候前にも申通り亂世の時は武士の心兵器より切成もの無之利用の器は外國の物も無異議行れ利用ならされば我傳來の物も廢弓馬長刀鎗鐵炮或は廢し或は行れ候へ共刀劔の利に於ては上古より今日に至り第一の器と相成り候は必竟是に過たるもの無之是我か血戰の利萬國に勝たる所以にして天下人心治亂と無く骨肉に徹たる思ひ入にて有之候斯の通りに思入たる人心にて且は陣法總て銃隊に變し專に銃炮を用ひ候共一たび兵亂と相成りては決て血戰を廢するの憂は無之事にて況哉治にして亂を忘れす一國天下の君相此實理を明め玉ひて西洋銃隊の陣法に變し勝を取るは專我か傳來の血戰に有之

事を人心に喩し刀鎗銃炮優劣無く誘ひ進め玉はんに何の弊害歟生すへきや士氣を振作するの道是に益たる事は無之候夫の西洋陣法を用もの元來其砲術を信し其陣法迄用事にて全亂世の實見より彼我兵器陣法の長短優劣の實理を明めたる見識にあらされは血戰の利用を廢する幣習を生するは當然之事にて全躰を論する事にては無之候

海軍問答書　元治元年著

我國最モ急ニス可キハ海軍ニ在リ然ルニ海軍ハ費用ノ巨大ナルヲ憚リ自然遲延ニ付スルノ病ヲ免レサルガ爲メニ起草シテ島津久光公ニ呈セシモノナリ時ニ久光公強藩ノ力ニ據リ朝廷ヲ戴キ幕府ヲ匡正シ天下ヲ一新セントスルノ志有リ

方今天下興運の大機會なり更張の道樣々なる可し就中至急の要領

は如何

強兵の一途なり萬事は是より擧る可し

強兵の道人を見るところ異なり或は固有の短兵を主張し或は西洋

の銃陣を主張す二者の外强兵の實用ある可き哉

往昔の如く本邦一國の戰爭なれば二者何も用ゆ可し方今航海大に開け四海の通路平陸より也便捷にして千萬里の所比隣なり海外の諸夷引き受すして叶わぬ時勢となり海軍に過きたる强兵あると無し

諸夷を引受くるは勿論なり我か固有の義勇を振ひ海港の要衝を取り固め必死の戰鬪を爲す時は必しも敗を取道には非す是又强兵に過あらす哉

方今の形勢本邦一國譬は大船の如く四海は總て平陸なり我か陸兵を以て彼か海軍を待つは船に乘りて陸上に戰か如し彼れ主にして我は客なり我は進て戰に難く退て守る可からす彼は利を見て進み不利を

見て退く是其勢致さるゝとありて致す可からす且つ本邦四方八達海運に非さるは無し彼若し二三艘の軍艦にて海運を鎖すときは全國の通路忽に絶て生民の困難云ふ可らす江戸大坂の如きは百日を待たすして飢餓に至る可し夫のみならす東浮西出近海を横行せは沿海の要港盡く守らさるを得す是徒に奔走に疲勞し戰わすして屈するなり是等淺近のことを察しても海軍を起さすんば有る可からさるを知る可し

海軍を起す可きは聞えたり是を强兵と云ふは如何

凡人は貴賤賢愚に拘はらす一心決定し動さるより强きは無し是則志の奪ふ可からさるものにして必死の地に入れは必死を決す古の兵を善する者舟を沈め水を背にす是皆必死の地に陷て必勝の策を定むるなり今海外の諸夷を引受て戰に彼は進て攻擊し我は守て應接す進む者は死地に陷入り守る者は後に顧る營は宇治勢田の橋を引き敵を待か如し大友皇子を初とし源頼政木曾義仲承久の亂新田義貞凡五度の

戰に一度も其利を得ると無く近く海外の事を擧は清國の英佛と所々の戰魯の英佛と黑海の戰墨西哥の墨佛と兩度の戰安南の佛との戰海陸の勢進守攻拒主客を殊にし勝敗既に顯然たり海軍は是に反し隨ふ所犄角の用を爲し一船即ち必死の地にして士卒力を一致にせさると を得す孫子云兵士甚陷則不懼無所往則固入深則專不得已則鬪眞に妙言に非さらん哉

海軍の强兵たるは聞えたり然は今日に當りては陸兵は用るに足らさる哉

是れ何の言そや我は唯主客の勢を云となり

海軍を起すの所置如何

方今の憂は天下列藩各々便利を占め人心一致せさるより大なるはなし四海萬國を引き受すして叶はさる時勢と成り國一致せすして何を以て天下を與さん哉況んや新なる海軍を起すに尤も以一致の所置に

出すんは有る可からす今幸に　天朝幕府兵庫に於て海軍を起すの命令を出されたり兵庫は大坂の咽喉にて本邦第一の要港なれは海軍場には至極の形勢を得たりと云ふ可し於是更に亦維新の令を出し左の件々の大綱を天下に布告す可し

第一　總督官に海軍一切の全權を命し嚴に有司文法の率制を禁す

一　列藩に海軍を起す大趣意を示し並に志し有る人は此に來り修行す可を喩す

第一　此に來り修行する人は衣食の用度官より之に給す

第一　總督官諸生を率て長崎に出張し洋人を呼迎へ三年を期し傳習せしむ

第一　海軍場中信賞必罰嚴に軍法を以て行ふ可し

總て傳習には費用を厭ふとなく十分の修行を盡さしめ海軍一切の規定は西洋の法則を斟酌して行ふ可し本邦の人の聰敏なるは洋人も亦

嘆美して亞細亞洲中第一と稱し尤事を爲すに曉けれは三年を待たす海軍の術我是を得ると疑無し傳習既に熟するに隨ひ別に將校を用ることを禁し總て此の諸生をして軍艦の職役を命し其才能長技に隨て任用し匹夫たり共一艦の長一軍の將にも擧け用ひ貴族たり共所長なけれは用ひす一切太平因循の習弊を去り軍國嚴齊の法則を行ひ信賞必罰威令上に明なるときは一軍齊肅命を用ひさるとを得す且夫海軍の實用たるや海外の事情に達し器械の精微を盡し萬里の風濤を凌き更に又各國戰鬪の實地を見聞せすんはある可らす軍艦十艘にも及ひなは代る〳〵海外に乘り出し各國を巡觀するときは聰明を開き膽氣を壯し彼が長を取りて我短を補ひ我長を以て彼か短を制し十年を待たすして全國の人心奮勵發動し外夷の恐るゝに足らざるのみならす却て萬國を呑むの正氣を發生するに至り今日恐怖の人情に比するに眞に晝夜明暗の變するか如くなる可し方今海外の各國英夷尤も强大と

稱す其國たるや地球の西北に偏する一孤島なれ共環海の便利に因て今日の盛大を爲すに至る本邦は地球の中央に位し環海の便利四通八達英に勝ると萬々なるのみならす人質の聰明にして勇鋭なると更に又外國の比類す可に非れは盛運年を逐に隨て非常聰明の人傑輩出し我か大道を明にし我か義勇を盛し外夷をして理屈し鋒挫け遂に我か仁義の風を仰くに至らしむると今日海軍を起すに本つくに非らんや

天下列藩は如何

一致の海軍は本なり天下の海軍は末なり其本既に起る時は其末も亦隨て起す可きは勿論なり乍去一致の根本强盛ならされは天下の海軍一に歸するとなく却て爭擾を爲すの媒と成て天下の用には立可からす且夫方今の勢道理明なりと雖も兵力强からされば不逞を制すると能はす兵力强しと雖も道理明かならされは人心を服すると能はす道理明に兵力備りて正に初て不逞を制し人心を服さしむ可し是れ唯外

夷に所するの道のみにあらす我か內地を治るにも然らさるとを得さるなり夫れ京師は天下の根本至尊の在ます所禮樂征伐の出る所なれは兵庫の海軍即是れ一大强兵親軍なり此海軍强勢なれは天下海軍一に歸し我か令する所に從て外は以て洋夷の侵寇を防き內は以て不逞の人心を制すへし加之天下の人情を通天下の人傑を舉て天下の衆致を盡正大公共の王道を行せ玉はんに內地は云に不及海外の各國まて自然に王化に從はさるとを得す何そ唯に區々として一國を守るのみならんや

天下列藩の疲弊極れり海軍を起さは更に疲弊を重て却て紛擾を生するに至る可如何

費用の甚しきは軍備より大なるは無く軍備の尤も大なるは海軍に過くるは無し方今海外の各國費用を厭はす國力を盡して軍艦炮器の精微を極め海軍の兵勢を盛にするは死生興亡目前に有て一身一國現實

の利害急迫なれはなり本邦一水の外四海皆戰爭の巷にして四夷八蠻縱横に航行し不可云の禍亂方に目前に起らんとす是其勢破船に乘りて大洋に浮に似たり風浪一たひ起らは覆沒せさる者幾と稀なり如此危急の時に當り天下列藩晏然として太平に安し費用を厭ひ軍備の實用を差置くは譬は全身痲痺にして疾痛疴痒を覺えさる者と相似たり至愚の甚しきに非さらんや然しなから二百年來太平武を忘るゝの弊政にて釀し成したる人情なれは恐れ多くも
廟堂の上斷然として自ら罪し玉ひ古人の所謂郊に舍するに則り露屋雨室も厭はせ玉はす無用の費を省き國力を强兵の一途に打懸け玉はゝ天下の人心自然に感動し興國の氣象に變すると鏡に懸て見る如し物して天下列藩の疲弊今日に極りたれは如何に無用を省かれたれ共海軍の費用に供するに足る可からす去らは又天下の農商に課せんとせは農商の疲弊更に甚しく忽に天下の人心を失ふ可し天下を舉て既

に是至困の地に落入たれは此莫大の費用何を以て辨せんや夫れ非常の海軍を起さんと欲せは先つ非常の費を辨せすんは有る可からす非常の費用を辨せんには非常の事業を起さすんは有へからす非常の事業を起すには幕府列藩均く課金を出されさるとを得ず試に高一萬石に年々百兩の金を課すれは總計大凡二十四五萬兩内外なり此の課金を以て元とし左の件々の事業を起さんと欲す

一　銅鑛を開く　一　鐵山を開く

一　船材を貯ふ

本邦銅鑛の富海外比類無きと稱し產物の最第一とす九州にて鑛庫と稱する銅山十ヶ所に下らされは廣く天下に吟味せば幾鑛有るも知る可からす如此寶庫有りて今に開けさる所以の者は邦内人民銅を用る所作の寡きと銅坐より買ひ入る直段の甚だ卑下なるとに因るとなり銅山にて紅銅に吹き上るとは嚴禁なる故にあら吹の銅にて銅坐に

渡し銅坐にて紅銅に吹き上るとなりあら銅二百目を紅銅に吹き上るは八十目の雜費懸りて百廿目の紅銅となる銅坐にてあら銅二百目斤を三匁五分内外に買入る故盛に出る銅山も總て廢止に及へり今海軍を起すに銅の入用夥しきのみならず外國にて高價なるは更に驚に堪たり

幕府より和蘭に渡さるゝ紅銅一斤（百六十目斤）銀八匁内外なりしに諸夷進港以來は俄に引き上けて當時は拾二匁内外と承る去れ共彼等相互の直段は更に又高價なるとにて其一證を擧るに清國にて乾寶錢一貫二百文を以て西洋用番銀一圓に易るなり乾寶錢は其質甚惡くして目方も又僅に三分なり我寛永錢（寛永錢の目方六分より一匁貳分迄にて十文なりし見れば一文九分二毛）なりに比すれは三分の一なれは一圓即ち四百文に相當す（四百文斤に直す時は二斤半に拾二匁不足し一斤百六十文となる）夫れのみならず紅銅と錢銅との位善惡遙かに隔りたれは紅銅一斤二十匁以上に上らされは平允の根段とは云ふ可からす

らす惣して海外各國にて銅の高價なる所以は軍艦炮器は論無し百般の器物銅を用ると夥しき故に何程堀り出しても餘り有ると無し且又墨西哥にて銅を產すると夥しく近十年來尤盛に堀り出し邦内礦を攻るの廠三千餘所に及ひ各國番銀三分の二分は墨西哥銀なり是よりして銀價下落して銅價は益々上騰すと云本邦にては銀は尊く銅は卑く各國と表裡を相成したる所に尊きの銀と卑の銀とを比較し交易通用の目方を定め金と銅錢の通用を禁せられし故（金は彼に比較し根段なりにや相當す）銅錢の直ひ定らすして一錢十文に當るを三文四文に密賣するに因て九州にては絶て銅錢は無きとに相成たり是國損の甚しきに非さらん哉

銅の根段如此高價なれは夫に應して銅山より買ひ入るゝ根段も亦相當に引上けは天下の寶庫一時に開ると疑ひ無し海軍莫大の費用を辨するに此の一途より大なるもの有る可からす銅に次ては鐵なり一切

の用是より大なるは無し曾て聞く奥羽の二州尤も鐵に富て所々驚く可きの鐵塊山有りと是等の山を開き便利に因て西洋製の高爐を設け鎔化して長崎に運輸し製鐵所にて百般の工作を爲さしむ可し總して民間の日用は鐵より便利なるは無けれども本邦に大に是を用るとを得さるものは鐵を製するの術を知らされば なり譬は三都會の如き家屋重密の處一家火を失すれは延て千萬家に及ふ百貨諸物烏有に付し衰弊を極るとは是より甚しきはなし此は火難を救ふに鐵屋に如くものの有る可からす製鐵所に於て鐵柱鐵板の類を製作し都會に出すときは材木瓦より一倍の高を益すと云へ共百年不易の造作なれは財力有る者誰か是を置て彼を用る者あらんや（或云外國にて鐵柱鐵板は根段材木より易しと果して然らは是に過たる便利なし）其外民間の用器鐵を用ひて爲す可きもの幾許も有るとなれは其直過當ならされは大に行るゝと必定なり船材は樫楠杉檜松を以て尤も上品とす近年來直ひ上騰すと云とも外國に比すれは尚ほ一と三

との如し良材に富たる國々より買ひ求めて長崎に於て貯へ置き軍艦製造の用に備る可し物して此三件の事は國々の奸民山師の者目を矚し時を待たるとなれは一令を出せは響の如く相應して邊土の隅々迄一時に起ると必然なり事情如此の勢なれは俄に是を起さんとせは忽に奸民の奇貨となり大破に及ふは分明なれは先ッ一大經綸局を設け廣く天下の人才を擧用ひ或は西洋攻礮の術を研究し其道明白なるときは奸民山師の者共自然に畏服して其奸術を施すとを得す我か使令に歸嚮するに至りては事業の大に行るゝのみならす又天下幾十万の奸民を變化して良民と爲す治道の一術に非さらんや夫れ古人の利を起すを戒むる所以は其利を憎むに非すして利を以て利とする者を憎む是所謂聚斂の事にして下を損して上を增す天下生民の害之より大なる者あると無し此の三件の利は天下列藩の置て行はさるとなれは其利を奪にも非す又萬民の業を助るとなけれは其害と成るにも非す

更又下を損して上を益す聚歛に出に非すして天下列藩の疲弊を救ひ海軍の用に供するとなれは夫の利を以て利とする者と天淵雲泥の相違なり是又附して辨せすんは有る可からす

軍艦は彼より買ひ入ると我にて製造すると何れか可然や

西洋各國軍艦炮器の製日を追て發明し國力を抛て製造する故に銅鐵材木の値年を追て上騰し（英國にて材木乏しく成たる故に遠く北亞墨利加の屬國より運送すと云）本邦に比すれは幾増倍なるも知る可からす正高價の物を以て製造したる軍艦炮器なれは其直の高價なるは更に論なきとなり此のみ品に富たる本邦にて製造の道を開かすして夫の高價の軍艦炮器を買ひ入るゝは愚昧の甚しきと謂ッ可し且夫軍艦の命數限り有れは一年を經れは直に減する故に各國互に識別し（一船必ず一船の號あり）彼は英製にて幾年を經此は墨製にて幾年を經たり或は何處にて破損したるを修覆したるの類分明に知れたる上に賣買の時は大船を釣り上る仕懸の術ありて舟底を吟味し値

の位を定る故に互に相欺くとは無きとなり本邦は眞の不案内故に彼等勝手に欺て十年の船を五年と唱へ破損の船を無難と云の類都會の古着店の者共か田舍漢を愚弄すると殆んと相似たるは又如何とも爲ること不能夫れのみならす前に云ふ通り貴の銀と卑きの銀と比較したる用番銀の直を以て買ひ入るゝことなれは此の損失も又た莫大に非さらんや彼れ此れを考へ見るに利害得失甚た是分明なれは銅鐵船材の經綸行はるゝに隨て長崎に於て造船廠を設け西洋工匠を呼迎へ製造するときは百害を去りて百利を來たす莫大の國益に非らさらんや

有客來訪言及時事反覆討論相共三嘆客曰可識哉乃次第其言如此甲子三月

沼山老隱識

富國論

國是三論　萬延元年著

先生越前ニ在ルノ日一藩ノ上下大ニ爲サントスルノ志有テ若眼一定ナラス故ニ廣ク執政諸有司ヲ會シ大綱三事ニ在ルヲ議定シ以テ一藩ノ國是トシ中根雪江ヲシテ其旨趣ヲ記セシメタルモノナリ

嘉永癸丑之夏米利堅國之使節渡來して國書を呈し和親交易之事を申出たりしかは幕府に於て其御許容の可否を列侯へ御垂問ありし以來交易利害の議論紛々として一定せす其害を唱ふる者は水府老公を魁首として鎖國の舊見を主張し其利とする者は幕府の廟算に雷同し時運の變革に隨ひ萬國交通の理を唱ふ此是非如何可有之哉

先つ鎖國の見を以てすれは　本邦五穀金銀を始め萬物豐饒他に求むるを待たすして人物其生を遂るに欠事なけれは數百年の鎖國毫も不

足の事を知らす然るを今鎖鑰を開かは我より出す處は我か有用の物にして彼より入る處は我無用の物なり有用を以て無用に易ふ其害一彼に出す處多けれは我に有處不足して我用を欠く其害二其物滅し其用不足する故其價大に貴に至る其害三其利を得る者は數輩の商賈にして其害は全國に被る其害四縱令物品を金銀に換るとも金銀も從來事を欠にあらされは此上の事は不用にして有用の物を減するに替る事なし其害五なり目今己に交易の爲に物價騰揚して四民共に其害を受て殆困難に及はんとする勢也是交易を開ける害なり

交易を開たる害は聞くごとくなれは猶いつまても鎖國すへき歟又鎖國の害もありしや

鎖國は二百餘年の染習となりたる事なれは其害尤大なれとも皆人鎖國の害たる事は心付さるなり其の次第を說んに二百年前には亂世に次たる比なれは衣食住を始萬事質素易簡にして事物を亂世に思ひ比

ふる故人事も穩にして不足もなかりしなれ共太平年久敷に隨ひ驕奢に成行も自然の勢にて日本國中諸大名の手前漸々に驕傲鄙重になりて參勤交代を初今日の諸用に付金銀の費は次第に多くなれ共金銀は增す方なく國中の人口は增多に及へとも土地は古昔の儘なれば費す處多くして出す處少く下なる者も是に准し富る者は分を忘れて驕に長し貧きも是に效ふて貧を忘れて驕らんとすれは各自に困窮逼迫を招き加之太平の恩澤に浴して遊手徒食の輩（但今日となりては武士も遊手徒食の類也）十の九に至れは生る者は依然として如前食む者而已增長する故物價自ら貴く物價貴に隨ひ金銀不足す金銀不足すれは四民困窮を生す乍併農工商の三民は力を以て食ふ故物價に隨ふて力役の價を增す故猶爲すへき樣あれ共唯士と稱する者は大名を始として收る處限り有て出す處其限を超るに至れは實に爲すへき樣なし仍之鎖國封建の制諸大名各一國一郡を鎖閉して已に利あれは他に害あるを顧みず利政聚歛いたら

さる處なけれ共國用の不足を補ひ難けれは不得止諸士の俸祿を借り豪農富商を絞り細民の膏血を吸ふても今日の急を救はさる事を得す農商も是が爲に疲弊を受る故愈物價に就て其窮を免れんとするを以其弊又士に及ひ交互困窮するに至る仍之上下共に榮辱禮節の差別も亂れて民心離叛に及ひ一揆を起し窮を訟へ上に迫るに至るも亦少なからす事重疊にして年を經て遂に騷亂を招かさる事を得さるも必然の勢なりさらは此弊を救は如何と云に大節儉を行ふて衣食住を初不益を省き有用を足す事なれ共不益を省ひて猶足らされは遂に有益を省くにいたる有益を省く時は與ふへきも與へさるに至り且官自ら儉して漸く官の急を救ふ勢なれは士民の急を救ふに遑あらす於是士民も亦自ら儉して其窮を免れしめん事を欲し其驕奢の弊を矯めて嚴令を下し華屋を毀ち美服を剝て質朴の古風に復さんとすれ共浸潤して下り來れる時風を一頓に復せんとするの難き而已ならす奢侈已に氣

習となつて奢侈たる事を思はす却て節儉を以て困難苛酷の新法の如く心得己に益するの上旨を察せすして自ら損しても猶驕惰の習慣に安んせんと欲する故人情にをいて拂戻なき事あたはす人情は拂戻すれ共外に救恤を施すへき術計なく又虐て課するに比すれは惠政とも云へき程の事なる故大儉を善とせさる事を得す雖然驕弊を矯て拂戻を生し士庶上下の人氣險惡鄙野に落入て四維を以て治めかたきに至るも亦不得止の勢なり方今航海自由を得て萬國比隣の如く交易する中に就て日本獨り鎖國の法を固くする時は外寇の兵釁を免るゝ事を得す其時に當つて治世すら殆困極せる國勢を以て兵備を嚴にし或は離叛或は拂戻の士民を驅て防禦の策を建攘夷の功を奏せん事甚以無覺束次第と云へし是鎖國の害なり

交易を開きたる害も大にして鎖國の弊も亦甚し方今の經濟如何して宜に適ふへきや

天地の氣運と萬國の形勢は人爲を以て私する事を得されは日本一國の私を以て鎖閉する事は勿論たとひ交易を開きても鎖國の見を以て開く故開閉共に形のことき弊害ありて長久の安全を得がたしされは天地の氣運に乘し萬國の事情に隨ひ公共の道を以て天下を經綸せは萬方無碍にして今日の憂る所は物て憂るに足らさるに至るへきなり

天下の大なるは姑く舍て先一國上の經綸如何せは可ならんや

萬國を該談するの器量ありて始て日本國を治むへく日本國を統攝する器量有て始めて一國を治むへく一國を管轄する器量ありて一職を治むへきは道理の當然なり公共の道に有て天下國家を分つへきにあらぬと先つ假に一國上に就て說き起すへけれ共擴充せは天下に及ふへきを知るへし凡封建にして鎖國するの困難は國郡の大小によつて差別あれど譬は一斗なれ一升なれ升を以て斗りたることく何事も其升內にて辨せさる事を得す仍之其善き者は己を儉して用を足す譬へ

は衣を典して米を買ふか如く寒を忍はさる事を得す其善からさる者は下を虐て己か用とすれは股を切て口に充つ腹に滿て身弊るといへるかことし且自國豐熟にして他國は凶歉ならん事を祈るとこき氣習なる故明君有ても纔に民を虐さるを以て仁政とする迄にて其眞の仁術を施すに至らす良臣といへるも土地を闢き府庫を充るを務として孟子の所謂古の民賊たる事を免かれす又民間の生産も搬出する先々に限りあれは出す事多けれは必其物品を壅滯し其價を卑して或は姦商の詐術に落大に價を減する事あれは民も力を勞するに倦て勉勵せす官府亦大に産を制する事を得す一國に金銀の出納も是に准して歉歲に少なき事はあれ共豐年に多きに至らす大約窮屈にして支拄多かりしに方今交易の道開けたれは外國を目的として信を守り義を固して通商の利を典し財用を通せは君仁政を施す事を得て臣民賊たる事を免かるへし其概略の條理如此

五穀租税の外幷糸麻楮漆の類を初物て民間に生産する處蓄來悉く商賈の手に賣渡す故に其價尤賤く就中姦商に逢へは種々の欺詐を受て其半價を得て止む者も亦多し落字是を官府に收むへし其價は民に益ありて官に損なきを限とし官に於て別に利を見る事なけれは民自ら其惠を蒙るへし

但横濱長崎等より物品月々の相場を聞調へ民間にて賣る處の相場に引當諸港への運賃其餘の雜費を加へ官府に損なくは民の乞ふに任せて精々高價に買へし

一國中の所産凡幾十萬金なるへし悉く官府に買ふ事を得されはたとへは福井三國港等に大問屋を設け豪農富商の正直なる者を選み元締となし諸産物を買ふ事官府と同樣なるへし

一以上諸物品を作り出し或は作り增んと欲すれ共力足らすして意の如くなる事を得さる者多し官又是に錢穀を貸して其の意を遂

しめ其物品を官に收め其價によつて其債を償しめ又利息を見る事なければ民大に便を得て且惠を蒙るへし

但元仕込夫食糞し仕入といへる類悉官府より貸出し利息を取事なく相對に高利の金銀を借の冗費を免れしむ物て官府の貸出しは元金を損せさる迄にて利を見る事なかるへし官府の利は外國より取るへし

一以上の諸物件其他民間所産の生育製法等に付簡便の方法器械等あるは先つ官に試み其實驗を經て是を民に施し敎へ導くに惻怛の眞心を以てすへし

但養蠶術を初め諸産生方幷農具其外にも大に人力を省き便利の仕方も有之由是等皆官府に於て十分試驗に及ひ衆人の信を取りて後施し行ふへしたとひ便法なり共新の事を强ふれは却て民心を害する事多し

一工商も亦同し其米錢を貸し其便利を敎へ其活計を通利せしむ

遊手徒食の類皆其好む處に隨ふて各其職業に就しむるに其用其具悉く官より是を貸すへし

以上の諸件に付き邪正の刑賞勤惰の勸懲は物て牧民の職に在る者の心力を竭すへき所也

民の急を周ふして其生を遂けしむる事は粗其要領を聽得たり士たる者の困究は如何すへきや

士は世祿を食て各分限あり其分限を忘れて節儉を修めす驕惰の爲に困窮に落入るものは恒の心を失へる徒なれは素より論するに足らす其困窮の憐むへく周ふへき者は災厄に遭ふ者と分限に過て眷族多き者なり其災厄は火難病患の類皆不得止事共なれは其大小輕重に從ふて救濟の制を設けて假貸賑恤し其多眷の如きは大約左の如し

士たる者の弟次男のこときは年比となりても妻を迎へさるは天下

一同武家の制なれは誰人異とせされ共壯より老に至る迄夫婦父子の大倫を廢して知る事を得さる故是か爲に不行跡に至る者も又多し最可憐の至なり當今富國强兵を事とすへき時勢なれは此輩をして各其用に充へきなれは先其才力の長短によりて是に多少の俸祿を與へ差當る衣食の急を免かれしめ其用る處に隨て是に居所を與ふ譬へは航海に志ある輩は海濱に居らしめ航海の具を與へ養蠶を願ふものは桑田に居らしめて蠶室を與ふといへる如く各其好む處によつて其生を聊せしめ其功勞を察して其俸祿を增し妻を迎へ子を擧るに至らしむへし海濱に在る者は遂に海軍の用に充つへく桑田に在る者は陸軍農兵の用に備ふへし其他刀匠銃工を初國用に充つへき事に力を竭んと願ふものは悉く請に任すへし

一處女の如きも亦同し專ら養蠶の道を敎へ其他好む處に隨て紡績織紝皆其物品を與へて其力に食しむへし

一假令多眷ならす共一藩の婦女をして養蠶の術をなさしめは各自の富足を得る而已ならす遂に國用を裨益するの偉績をなすへし

凡國を治むるは則民を治るにて士は民を治るの具なり勿論士民共に孝悌信忠を敎るは治道の本源なれ共敎は富を待て施すへきも聖人の遺意なれは澆季の今日に當つては猶更富すを以て先務とすへし

士民を富すは當今の急務なるは聞へたれ共富足の政を爲には盡く財用によらすと云となし於官府如此財用を給するに如何の術ありやを

財用の融通鎖國の昔日に比すれは大に其便宜を得たりと云へし今や民間に無量多數の生産あり共是を海外に運輸すれは價を減せす且壅滯の憂なしされは勉めて産を制するか爲に民を富し産を生するによつて國を富し士を富すへし一隅を擧て是を譬んに先つ壹萬金の銀鈔を製し民に貸して養蠶の料に充て其繭糸を官に收め是を開港の地に

輸し洋商に賣ならは大約壹萬千金の正金を得へし如此なれは楮札數目を閲せすして正金となつて言ふへからさるの鴻益ある而已ならす加ふるに千金の利有り官府此利を私するとなし公に衆に示し悉く是を散して救恤し其他出て反らさるの所用に給す仍之利を得る事多けれは所用益足るへし管繭糸而已ならす民間の所産制するに此法を以てし年々正金の入るを見て楮銀を出し財用を通する事前の如くならは民間の生産も無數に增進し官府も年を逐ふて正金に富むへし正金の融通自在なれは物價の貴きは憂るに足らす上下の便利是に過たるはなし乍併もし楮銀增溢の恐れあらは正金を以て銀局或は司農局に就て楮銀を買ふて其用に給せは官府諸局の般富も足を翹て俟つへし國産の内糸茶種合せて十萬餘金なるへし此二種を假に官府の扱ひとして見ても夥數の正金にして是に換る銀札の製造も容易ならす又製造出來る共年々の事也乍併物價の貴きに隨ひ通用金も多かれは弛張損益の斟酌あるへき事也乍併物價の貴きに隨ひ通用金も多かれは弛張損益の融通逼迫にして諸人の難渋なれは世上の了見なる以て量り難しと雖も銀札過多の憂もあるへし銀札出來の員數も銀國の目當なる以て爲替

前に組めは銀札頓て正金となると雖も今日に同しき樣なれさも且爲替の正は約束なき邪には至り難し昔の爲替は銀札有て今日のこと、際限なき邪には至りかたけ金多く江戸の用となる恐てある國中の益となる事なき故銀札を出すを多れは銀局の際の用となる恐てある國中の益となる事なき故銀札を出すを多今日の如く盛大の融通には至りかたけく紙札の正金に化するを哪指支あるとなきは交易の開けたる利益なし今は品物さへあれは外國目當に賣込故恰も塵芥を海河へ流すか加り今や日本國と外國と銀幣の直平均を得さるを以て幕府大に混雜を生し全國の困窮にも及ふへき勢あり自今海外の强國輻湊して無數の洋銀を運輸し日本の商賈を壓倒せんとするの時なれは鎖國の舊見を以て日本國限りの制度を建抗衝せんと欲すれ共敵すへからさるは眼前の事にして日本貨幣の權柄遂には彼に奪はれて洋銀と一般の價直となるへきは必定なれは一國中の物價も今日騰揚せしむるも又一種の先見なり日本の物品を洋銀に易れは非常の下直となるを以て猶更外國の利を附益して日本の損失となれは物品の高價なるは日本の益なり乍併物貴して金銀不足なれは世上の融通逼迫する故たとへは物品三倍の高價とならは銀札も亦三倍に增益せされは貨財流通し難し

官府の正金山の如くならんには通用の銀札水のことくなる共故障も
懸念もある事なくして士民共に大に便宜を得へし於是官府其富を群
黎に散し窮を救ひ孤を恤み刑罰を省き税歛を薄し教ゆるに孝悌の義
を以てせは下も好生の德に懐ひて上を仰く事は父母の如くなるに至
らは教化駸かに行はれて何事をか爲すへからさらん推て天下に及ぼ
すも亦難からさるへし

天下國家の經綸も根元の政事を棄て只管交易通商を本とする由な
れは當時となりては物て西洋風を善として國天下の法則とも爲す
可きにや

通商交易の事は近年外國より申立たる故俗人は是より始りたる如く
心得れとも決て左にあらす素より外國との通商は交易の大なるもの
なれ共其道は天地間固有の定理にして彼人を治る者は人に食はれ人
を食ふ者は人に治らるゝといへるも則交易の道にて政事といへるも

別事ならす民を養ふか本躰にして六府を修め三事を治る事も皆交易
に外ならす先つ水火金木土穀といへは山川海に地力人力を加へ民用
を利し人生を厚ふする自然の條理にして堯舜の天下を治るも此他に
出てす九川を決り四海に注き畎澮を濬し川を距り有無を遷し居を化
す皆水路を開き舟楫を通し民をして粒食を得せしむ交易の政事にて
就中禹貢には土地の性質によりて金銀鉛鐵を初蠶桑染糸其外所有物
産を開き河海山澤を通利し貢賦の制をも定られたる大交易の善政丕
績は勿論にて人政にも食貨を先にし九經も庶民を子とし百工を來す
の事あり是等皆大聖の立定められたる善教仁政にして萬世に亘り永
く賴るへき大經大本也然るを本邦は中古以來兵亂相尋くの世となり
王室微にして諸侯群國に割據し各疆域を守り互に攻伐を事とすれは
生民を視る事艸芥の如し夫役の苛虐軍餉の暴歛至らさる所なし政教
已に地を拂ふて蹈鈇に長するを明主とし謀畧に宜きを良臣とせる時

世となる故に慶元の際既に建藁の代となりても猶餘風を存し本多佐州を初帷幄參謀の名臣悉皆　德川御一家之基業盛大固定に心志を盡して曾て天下生靈を以て念とする事なし自是以來當時に至る迄君相の英明頗る多しといへ共皆遺緒をついて御一家の私事を經營する而已なれは諸侯亦是に倣ふて各家祖先以來の舊套によつて君臣共に自國の便宜安全を謀つて隣國を壑とするの氣習となれる故　幕府を初各國に於て名臣良吏と稱する人傑も皆鎖國の套局を免れす身を其君に致し力を其國に竭すを以て忠愛の情多くは好生の德を損し却て民心の拂戾を招く國の治りかたき所以なり日本全國の形勢如斯區々分裂して統一の制あるとなけれは癸丑の墨使彼理が日本紀行に無政事の國と看破せしは實に活眼洞視と云へし當今忌諱を犯して論する時は　幕府の諸侯を待つ國初の制度其兵力を殺ん事を欲するによりて參勤交代を初大小に隨て造營の助功兩山其他の火防關門の守衛且近

年に至つては邊警の防守等最勞役を極めて各國の疲弊民庶に被る事を顧ず又金銀貨幣の事より諸般の制度天下に布告施行する所　覇府の權柄により　德川御一家の便利私營にして絶て天下を安んし庶民を子とするの政教あるとなし彼理か無政事といへるも寔に然り鎖國の制割據自全に安んする習俗なれはこそ幸にして禍亂敗亡には至らされ共方今萬國の形勢丕變して各大に治教を開き墨利堅に於ては華盛頓以來三大規模を立て一は天地間の慘毒殺戮に超たるはなき故天意に則て宇内の戰爭を息るを以て務とし一は智識を世界萬國に取て治教を裨益するを以て務とし一は全國の大統領の權柄賢に讓て子に傳へす君臣の義を廢して一向公共和平を以て務とし政法治術其他百般の技藝器械等に至るまて凡地球上善美と稱する者は悉く取りて吾有となし大に好生の仁風を揚け英吉利に有つては政躰一に民情に本づき官の行ふ處は大小となく必悉民に議り其便とする處に隨て其好

まさる處を强ひす出戎出好も亦然り仍之魯と戰ひ清と戰ふ兵革數年死傷無數計費幾萬は皆是を民に取れとも一人の怨嗟あるとなし其他俄羅斯を初各國多くは文武の學校は勿論病院幼院啞聾院等を設け政敎悉く倫理によつて生民の爲にするに急ならさるはなし殆三代の治敎に符合するに至る如此諸國來て日本の鎖鑰を開くに公共の道を以てする時は日本猶鎖國の舊見を執り私營の政を務めて交易の理を知り得すんは愚といはすして何そや宜敷支那に鑒るへし彼は亞細亞洲中の大邦にして往古大聖相繼て勃興し文物萬國に先達て開けし故草昧の外國を九夷八蠻に分つて懷柔の政を施せし以降主暗愚にして失ひ賢明にして興り世代革命多しといへ共自ら中國華域と稱し外國を待つに蠻夷を以てするは古に異ならす今の滿清は古の所謂北狄より興り明を滅して中國に入り邦俗をも一變せしかと康熙乾隆の諸帝賢德有て政治を明かにし文敎を一新し克く太平を致すといへ共開國以

來百數十年道光咸豐に至つて昇平の久敷其弊驕傲文弱に流れ海外諸國の往々理を窮め智を開き仁を施し義を崇ひ國富み兵强く諸夏の亡きか如くならさるを知らす待つに昔日の夷狄を以てし蔑視する事禽獸に等しきにより道光の末年鴉片の亂により大に英國の爲に挫折せられ不得止和親の條約を立るといへ共朝野の氣習驕惰侮慢にして約を守ると堅からす數變數約毎に彼が大義に屈し兵威に怖好港沃土を折て其違約の罪を償ひ其屈辱を極むれ共朝廷無人優游無斷曾て懲忿の念なく又和戰の議を決せす唯偸安を私するのみならす猶約に背ひて英使を濫殺する暴慢の行あり仍之英國怒らさるとを得す今歲四月佛國と兵を併せ大舉して其不信不義の罪を討ち七月遂に天津の河口を破り進んて北京に迫れる故清王大に恐て韃靼に遁逃するの風聞あり支那たと共英國の好意によつて帝國の號を存するとも國躰の隕墜如斯なれは後帝號を專らするとを得へからす支那は日本と唇齒の國

なり其覆轍目前に在て齒已に寒し坐視傍觀の秋にあらす於是今や天德に則り聖敎に據り萬國の情狀を察し利用厚生大に經綸の道を開ひて政敎を一新し富國强兵偏に外國の侮を禦んと欲す敢て洋風を尙ふにあらす聞く人其原頭を愆り認る事なかれ

强兵論

富國の道は已に聞く事を得たり强兵是に次くへし當世の兵を說く或は固有の短兵接戰の利用を確執し或は西洋銃陣の猛烈を主張す其優劣利害如何

昔時の如く日本國中の事ならんにはいつれにてもあるへけれとも當今航海大に開け海外の諸國をも引受すしては適はさる時勢と成ては

日本孤島の防守は海軍に過たる强兵はなし

海軍の事は是迄　本朝において法則とする程の聞へもなく又西洋法も開けたりとも見えさるに何を以其利用を知るへき

先つ世界の形勢航海の盛大となつて海軍の專要なる事より說くへし本邦の事は姑く舍く五大洲の內亞細亞中の支那は東面海に臨みたる巨邦にして文物早く開らけ稻麥黍稷を初人類の生活において足らさる事なく其他智巧技藝百貨玩好に及ふまて皆內地に取て欠事なくして豐饒なれは上朝廷より下庶民に至るまて誇大驕傲の風習あつて海外の諸國來て貿易するを准せとも往て事物を求るに意なく又人に取て智識を開らく事を知らす是支那の兵力衰弱にして諸州の凌辱を受る所以なり歐羅巴は是に異なり其疆域東方而已亞細亞の地に接して三面海に濱し地球の西北に位し亞細亞に比すれば尤偏小にして事物缺欠多きを以て他に求めさる事を得す仍之州內諸國各航海を事とせ

さる事を得さるも又自然の勢にして百般の貿易は勿論時としては兵艦を航し互に掠略劫奪して其疆土屬地を開拓するを務とす波爾杜瓦爾の亞弗利迦の喜望峯を過きて印度海に航し伊斯巴尼亞の閑龍は北亞米利加の東邊に到り亞米利加の南亞米利加を撿出せし抔を初として競ふて遠略を事とせり就中英吉利は歐羅巴洲の西邊に屬する孤島にして環海の國なるを以て最も大に航海を務め屬地を擴め專ら富强を事とす我文祿の頃和蘭初而印度に通販して大利を得たるにより英吉利是を羨み相繼て到り其他佛蘭西亞米利加呂宋葡萄牙等も又各商埠を立て販賣す印度は亞細亞の南大部にして四方中に五分し土地壤沃物産の豐饒各國に甲たる故英吉利遂に幾多の軍艦を航し數戰の後其王を逐ひ其國を奪ひ今日に到ては南東中の三部は已に英の所屬と成て西北の二部而已猶各自の國王あり西人曾て印度物産の富足萬國に冠絶するを以て世界中の寶藏と稱するに英吉利特り其利を擅にせ

り仍之英の印度を重んする事本國に超て駐守の兵備最其嚴を致す英は海内の强國にして歐羅巴亞細亞亞米利加亞非利加濠太利亞の諸洲に於て呑併の屬地三十五部海内の民數五分の一を有つて强大無比と稱するも其因る處は印度の富庫あるを以て其勢力を逞ふする事を得たる也物而西洋の諸國古より今に到つて大小の兵革息む時なくして就中文化年間佛蘭西僞帝の亂を古來未曾有と稱し歐羅巴諸州陸軍の制此時より一變するに到れとも近年魯西亞の土耳其英佛との戰爭は是に過たりといへり夫魯西亞は東亞細亞より西歐羅巴に亘り廣袤圓方四百五十萬里の疆域にして强盛諸州に冠たれとも其地勢北は氷海に到り南は黑海土耳其に至り東は亞細亞の藩屬國に接し西は歐羅巴の諸州に連り大約東西に長くして南北に狹し廣大如是なれとも黑海の亞速白海の澤加牙東海の汾蘭利芽の諸港と東北隅に甘查甲あれとも共に海運に便ならすして遠畧を務るに利あらす於是裏海に傍ふて

陸略より西北の西印度を畧し遂に東南中の三印度を取つて英國の膏肬を殺き印度海に向ふて大に航海を開き雄圖を海内に擅にせん事を希望し輿都哥士の大山を隔て英と阿付哥尼部を爭ひ兵結んで解さる事數年魯もし志を得れは英必屈すへきの勢なれは英全力を竭して是を捍拒す是英魯の仇讎をなす原因也近年魯又土耳其を畧して地中海より航路を大西洋に開かんとせしを英佛これを助けて魯と抗拒して黑海及地中海に戰ふ紀元以來海軍の大なる此時に過たるはなく海軍の制一變して英國新に迦農舶を製して魯の堡砦を攻擊して其鋭氣を折きたり鬪爭數年死傷數十萬人和約成て魯國軍艦を地中海に置く可らさるを誓ふて互に兵革を收たるといへとも魯猶大志を遂さるを慍り間諜を印度に遣つて各自の國王を慫慂して兵釁を皷舞し其弊に乘して英の所轄を掠略せん事を謀り又滿清に約して黑龍江の地を借り馬頭を開らき日本海に向ふて大に航路を通し宿志を朝鮮海より南大

洋に偃んとす識己に決して黑龍江より都府比特革に到つて七千餘里火輪車の鐵道を造り畢るといへり魯國の日本に通して慇懃を致し又蝦夷の經界を論す其根據知るべき也黑龍江は我北蝦夷の薩哈連に隣れは其馬頭繁盛に到らは諸州の船舶日本海に幅輳して英魯の戰爭も亦數年ならすして日本海面に起らんとするの勢あり此時に當つて日本咽喉の地に在て其嚮背大に二國の强弱に關係すれは二國必日本を爭ふへけれは日本の危險尤甚しといふへし今年英佛大擧して滿清を討ち天津を破り京畿に迫る魯鷸蚌の勢を傍觀して一虎の斃るを待つに似たり魯もし志を支那に擅にするとを得は實に獲るへからさるの强盛を致すへし英の畏憚するも亦宜也海外の形勢如此日新月盛なるに日本獨り太平の安を偷んで驕兵を驅て見蠶に等しき操練を事とすとも何ぞ敵愾の用をかなすへき海軍を舍て防禦の策なき所以なり

外國の形勢聞く如くなれは此時に當つて日本國の所置は如何すへ

きや

日本は亞細亞に屬する東海中の一孤島なると猶英吉利の歐羅巴に於るか如し其國の環海險惡且颶風暴發の恐れあつて航海頗る艱難なる故自ら外寇の侵襲を免れ四國九州を分つて運輸を便にし物産を富足し外國に求すして欠るとなし造化の主宰何の好意を以て如是なる善美の邦域を造り日本人何の幸あつて如此樂國に生するやと魯西亞の堅布爾か鎖國論に讃美せるか如し天險自然の國勢にして剖判已來外國の侮りを受たるとなし雖然前にもいへる如く外國の形勢大に變して航海の術盛に開け洋裡の通航は平陸よりも便捷にして火輪船を發明せし以來は千萬里亦比隣の如し地球上氷海を除くの外は至らぬ隈もなし天險も恃みかたき時勢となれる中に日本のみ獨立鎖國してあるへき樣なけれは魯西亞は數十年前より通商を乞へとも准されす英吉利の乞へるも准されさるにより米利堅深く謀り遠く慮り嘉永癸巳

に到つて軍艦を引て浦賀に航し兵威を輝し虛喝を示し漸く其鎖鑰を開きたれは魯英佛の諸國も相繼て來航し各和親貿易の章程を立たり仍之日本稍海外の情狀を審にするとを得たるに猶舊見を固執して短兵陸戰を本邦の長技と賴み或は俄に銃陣を學んて侮を禦かんとする實に可憐の陋習なり今となりては日本孤島譬へは大船の如し四海は陸地の如し我陸軍を以て彼の海軍を待つは船に乘て陸上に戰ふか如し彼主にして我客なり我は進んて擊に難く退て守るに處なし彼は利を見て進み不利を知て退く進退自在なれは致さるゝとあつて致すへからす且彼二三艘の軍艦を以東浮西出せは日本沿海悉く守らさるとを得す徒らに奔命に疲れて戰はすして斃れんとす又近海に横行して海運を妨け奪はゝ全國彼是の通路を絶て困難いふへからす江府の如きは數日を出すして飢餓に至るへし是等淺近の數件によつて考察すとも陸軍の用なくして海軍の奥さすんはあるへからさるを知るへし

英國を按するに禦外侮治屬地不得不籍兵力以壯國威一千七百九十六年內外步騎五萬七千二百五十八一千八百十五年二十五萬八一千八百四十八年步騎十二萬二千八百人小校九千九百人中校五千九百九十五人馬一萬一千四一千八百五十二年十萬二千人外二萬五千人屬東印度公司印度土人隷軍籍者三十餘萬人此外如造鉛丸控地洞等匠役一萬五千人大英兵船最爲著名一千八百四十八年兵船六百七十三號常用者四百二十號火輪船亦在其數礮一萬五千位水手二萬九千五百人駐防水陸軍士一萬三千五百人將校九百人與法蘭西戰時兵船一千號水手十八萬四千人至今日而火輪兵船計七百號餘甚多船中軍士水手八萬八千人軍裝火器船二百四十號云々軍士較前多至二倍一千八百五十六年共二十餘萬騎云々と見えたり文祿中豐臣氏朝鮮の役に日本の兵數三十五萬騎といへるを英國に比較するに餘りなきにあらす且日本と英國とは國勢相似たれは强兵を務むるも英に則り假に英國の常用に擬して四

百二十號の軍艦礮一萬五千位を備へ水手二萬九千五百人軍士一萬三千五百人將校九百人計を海軍となし開港の諸地に於て兵營を設け兵艦を繫き不虞に備へ變に應し互に相救はゝ略大方の侮りを禦くに足るへし英國は西北に偏し地勢宜きを得されとも環海の便宜あるを以て克く遠略を擅にするとを得て强大今日の如きに至れり況や本邦は地球の中央に位し環海の便四通八達英に勝ると萬々なれは　幕府も し維新の令を下し固有の鋭勇を鼓舞し全國の人心を固結し其軍制を定め其威令を明かにせば外國の恐るゝに足らさるのみならす時あつては海外の諸洲に渡航し我義勇を以て彼か兵爭を釋かば數年ならすして外國却て我仁風を仰くに到らん

海軍の必用なるも　幕府の命令によらては興すへき樣無きに似たり然るを是を一國に施さば如何してよろしからん

當今　幕府の命に據らざれば分國限りのとなれは海軍と稱する程の

事は出來ましけれとも先つ士分の内當勤は勿論弟子の航海に志あるものには其才によつて多少の月俸を與へ衣食の急を免かれしめ海濱に居住せしめ初めは手寄能き漁船に乘て獵業をなし或は商船に乗組て他國に航し海上の風波に馴しむべし官府別にコットルスクーテル等の異樣船二三艘を造つて軍艦製造に志あるものは此役に供すへし惣督の人を任し衆と是に乘らしめ是に二三千金を與へて其出入を問はす一船の計議によつて物品の交易或は鯨獵等惣て其所好に任せもし交易して利を得るとあらは是を一船の人員に頒付し還本は再度の用金に充つ鯨獵も亦同然なるへし如此せは功驗を見て利あるに進むは人の常情なれは窮士等大に便を得て其術を窮め其業を樂しむに至るへし又人々の好みによつて測量推歩の術をも學はしめ是を實地に試むへし士人常に他邦に往來して見聞を廣め襟懐を宏にし或は颶風怒濤に逢ひ一船心力を合せて相救ふの艱險に習ひ勇義自ら奮發して海を視ると平地の如く

なるに到らは　幕府新令の日を待て必海軍の用に供すへきなり

先つ航海に馴れて遂に海軍の用をなすへきは聞へたれとも是を強兵と稱するは如何に

士人をして武士道を講明せしむるに過たる強兵なしといへとも其心膽を實事上に練磨するとは海軍より善きはなし凡人は貴賤賢愚によらす一心決定して動かさるより強きはなし即ち志の奪ふへからさるもの也人必死の地に入れは心必決す古の兵を善くする者舟を沈め水を背にす皆是を必死の地に置きて必勝の策を定るなり今數百年の昇平に習慣し來れる驕兵を以て徒らに行伍進退を訓練すとも戰鬪の實地に臨み炮聲如雷白刃如電に至らは恐くは畏怖狼狽を生すへし加之海陸の接戰已に主客の勢を異にすれは海軍にあらすしては決て對抗するとを得へからす試に一國を論するとも敵船もし二三里外に停泊して種々の變態を示さは陸地防守の兵を出すと一處に止るへからす

且進擊の鋭氣なければ必退守の念なきと能はざるは自然の勢なり海軍は是に反し隨ふ處犄角の用を爲すへく一船即必死の地にして士卒力を一致せさる事を得す孫子も兵士甚陷則不懼無所往則固入深則拘不得已則鬪といへり古來兵制の沿革一ならす源平の頃は弓馬長刀を專用し應仁の頃より鎗を以て上功とし騎戰廢して步戰多し弘治の頃より鐵炮行はれて弓矢自ら廢れたるも利用の時勢に切なるにより自ら變革せさるとを得す今は陸軍を後にして海軍を先とすへき時なるのみならす驕兵をして强兵と變するも亦海軍に如くへからす試にいはゝ一國の兵士一萬ならは强壯七千を以海軍となし老弱三千を以て內地の守衛に充て可ならんか然れとも一國俄に海軍を興すへくもあらぬは先つ其好む所に隨ふて手を下し海に馴れ船に習はし平時といへとも一船力を戮せて死を共にするの氣習を存せしめは所謂逸道を以て勞し生道を以て殺すの權宜にして異日海軍の用を爲すに足れり

今や　幕府航海を開かるへきの聞へあれは弛禁の時を待て列藩に先立速に交易通商に托して海外の諸國に航し其情狀形勢を觀察し時としては戰爭の實地を蹈は精神自ら湧發して初て太平の習氣を脫し傳聞の者といへとも志氣を奮勵し鋭勇を興起すると豈記載を讀み畫圖を見るの類ならんや是等皆强兵の事にして海軍を專らにすへき所以なり其軍艦の製造戰鬪の方法の如きは　幕府の命令を待て他日の講究にあるへし

士道

文武は士たる者の職分にして治道の要領たる事は誰しも稱道する處なれ共今其文と指す者は經史に通し古今に涉る藝にして多くは空理

に入り博通に流れ甚敗は記誦詞章に止る其武と稱する者は馬を馳せ劒を試る術にして徒に意味を談し高妙を說き或は剛壯猛烈を尙ひ甚敗は勝敗を競ふるに至る是故に學者は武人の迂濶麁暴にして用ふるに足らざるを鄙しめ武人は學者の高慢柔弱にして事に堪へざるを嘲り互に相容れず治具却て爭端を啓き予楯を事とするは日本國中の通弊にして其道の原頭明らかならざるによれり唯國を治るに文武を以てするといへる虛聲に吠へて其實理を躰察せざる故今の文武は相爭ふの媒となるのみにて治を圖るに用ゆべからずさらは其眞文眞武は如何といふに文武といへる事の古へ物に見えたるは書の大禹謨に帝舜の德を稱述して乃聖乃神乃武乃文といへり是そ眞の武文の本義にして當時讀むべきの典故習ふべきの武伎あるべくもあらず唯其聖德の外に發せるを指し其仁義剛柔を形容して文武と云素より德性による事にて決て藝術抔に關るべき事にあらざるは勿論なり後世是を分

判して兩途となし兩事と立たるは大に古意に戾れるなり　本朝も中古爭亂の時に當つても有識の將士は權謀智術强勇而已を以て衆を服し國を治るに足ざるを悟り心を兩矢霰彈の中に治め膽を千槊萬刀の下に練り自ら反して己を脩め人を治るの方法を工夫自得せる故克く開國創業の功を成し或は輔翼贊成の勳を建たり是尙武の本意心術に在て伎藝にあらざる所以にして加藤淸正主の大十文字本多忠勝主の蜻蛉切師傳あつて修行せられしといふ事も聞かされとも一心の鍛錬より發して先登陷陣八面無敵武名を汗靑に傳へ君を輔け亂を撥ふの功業一時を掩ひしも皆武道の致す所にして武術の所爲にあらざるを見るべし今の武術の興るや織豐二氏の時に當て天下寧定り戰爭特に息まんとす於是上泉氏を初刀鎗其他の武伎に精絕せる徒各流祖と成て戰鬪の實地に擬て其伎術を傳へ心を死生の外に鍛錬する事を敎ゆ天下の將士も已に心を實戰の地に鍛錬する事を得さるの時となつて

は各師を求めて學ばさる事を得す雖然敎る者學ふ者此心法を先として伎藝を後にす依て昔時其伎に長せる者は必時事に達す就中北條房州小幡景憲の兵理を說く專ら經綸に任して行伍進退に止らず柳生但州の　猷廟に仕へて大政に參預し宮本武藏の細川家に賓師として國事を謀りし如き皆一時の人材俊傑にして後世の兵家武人を以て稱する類にあらす武藏の武を敎ゆるを聞くに一向心法に本つき反求克己齊家治國士道の本意を講究するを常とす然れとも空手の坐論而已にては禪家の觀法に類し空理に落るを以て時としては敵手に逢ひ剌擊に當り學ふ處の心術の治否を鍛錬せしむ故に木太刀の演習は一月中僅に六次にして其他は武士たるの實躰を講習切磋せし事とぞ唯武藏のみならす當時の武人大約如此なりしは各其傳書の奥旨を見て知るべし乍併亂後不文之世態理を說き道を談するに多くは手を佛氏に假れるを以て不得止事佛理に似たるも亦尠からす古人武を學んで文な

る事概如此なりき爾後昇平久敷に隨ひ文華日々に開け文學を業とする者出來りて就て學ふ者亦多し依之武人と稱する者多くは文盲にして偏武の伎藝に局し只管其術の精妙を得んと欲するを終身の務とし有文の世に生れて一丁字を知らす其拙劣を極むれとも敢て羞辱たる事を知らす撫劒疾視唯敵に勝て君恩に報せん事を志願とし其汗れるに至て數家の許狀を得て名を干め職に就くの階梯となさん事を心とするに至れるは痛歎の極といふへし近世文化頃熊本の藩に長沼十郎左衛門といへる資藏院流槍術の師範あり頗有識の士にして槍術に長し十九歳の時父の印可を得て其以來は槍を執つて演習せし事なく專ら心法を鍛練し日々門弟子を集め士道を講究し不文にしては智に闇らく理を窮むるに足らさるを悟つて門人と共に經史を學ひ德性を原ね事務を論し其道を窮め其術を試驗せしかは百餘人の門人中遂に十二三人の人材を生し各其伎に精しきは元よりにて皆公に奉て要路に

當り顯職に庸られて政敎の裨益となれり其子十郎助槍術は殆精妙を極むれとも父の心法を傳へ得さるを以て門人と議して師範を辭退せり是等古の武に近くして師弟共に士道の要を得たりといふへし凡天下國家を治るに治亂共に人を得るに非されは難し人を得るは文武の道に非されは難し於是古今人皆文武の道人材を敎育するの樞鈕たる事を知れとも其文武の本然心法に因る事を會せさる故今の文武を以て人材を得んと欲するは譬へは砂を蒸して飯とせんと欲する如くなれは人材は愈得かたくして國家の治らさる事知るへし

或問今文武の道を說くに一向に武を論して文に及はさるは如何

答曰文を說き武を說く即ち文武の岐する所以にして文武本一源なるを知らされはなり素より尙武の御國風なるか故に今世政令惣て幕府に出て將士共に武家と稱し武士と呼ひ武を以て名とするにあらすやされは武家に生るゝ者は胎內よりの武士にして物の心をしれば即

武士たる事を知るは習氣の自然なる故敎も亦自然に隨ふて武を以てすへき事にて武を離れて士道ある事なけれはなり然るを人皆武を以て刀槍弓馬等の伎藝とする故に又文學を以て對せされは偏廢の恐あるか故に脩文講武を口實となし學校を設け子弟を業に就しめ文を以て義理を明らかにし治道を稗け武を以勇闘を習はし身躰を强健にして不虞に備んと欲するは列藩の中に就て有道と稱する國々の通例なれとも文武共に其本義を失へは學校によつて人材輩出の功効ある事なく却て士氣の扞格騷擾を招くもの多し是皆文武の原頭を明かにせすして其末藝によれるの大弊なり元來武は士道の本躰なれは己に克く其武士たるを知れは武士道をしらすしてはあるましきを知り其武士道を知らんと欲すれは綱常に本付上は君父に事ふるより下は朋友に交るに至り家を齊へ國を治るの道を講究せさる事を得す已に其意を知れとも是を事業に徵し其至當を得されは治敎に補ひなきを以自

反力行精勵刻苦心法を錬つて是を一擊死生を決するの伎術に驗し百折千磨且練り且試みたとひ天地反覆の變亂に處しても一心靜定士道を執て差錯なからん事を欲す於是道理を聖經に求め治亂を史傳に檢せさる事を得さるに至るは自然の勢にして武を說て文に及はされども文武の內に寓して武の文たる所以なり如此なれは人に强るに道を以てせすして人自ら道を信ず是を以て力を武道の講習に盡せば學校の施設を假らずして文武並び行はるゝ事を知るべし

問三代の聖德も學校を設けて敎を爲せし由なるに今學校の治敎に益なきが如くいへるは如何

曰三代の學校の大意は大學の序にも見えたる如く洒掃應對より始て脩己治人の道を敎ゆるに惣て德性の固有に本つき人の人たる職分を盡さしむるまでにて一ッとして强爲に亘る事なし今の學校は經史を記誦講論し武術を演習鍛錬する道場にして法を立制を設け智術を以

て諸士子弟を驅て强て業に就かしむ依之人々の長處に任せて或は文學或は武伎互に黨派を分つて學校中に相爭ふ是故に文に文の用なく武に武の實ある事なし學校の名は三代に同じけれども敎を爲すに至つては天淵の差違あり學校も三代の學校ならんには間然すべきなければ學校の名を惡むにはあらず唯今の學校の治敎に益なき事如此なるをいふなり

問文武は心法に本つくべき事なるを今の文武は藝術に落て實用なしといへれど文學をせずして孝悌忠信の道を知るによしなし武術學はずしては武士の本業を遺るゝに非ずや是を藝術なればとて棄たらんには士たる者文もなく武も知らず不學無術の者にこそなるべけれ且武術を以て心法を錬るを事とせば唯々さへ懶惰柔弱にして勞役を厭ひ業合を勤めず劇敵事となりては曾しこそあれやがて拳亂れ氣息絕る族も坐上に高妙の意味を談論して高手名人の面持して俗人に誇る

も多かる氣習なれば心法の説恐らくは其徒の局套に落て口實となり遂には見識同樣の形計にや成行きなん又術を鄙み棄る事となりては武人の筋力を强くし躰氣を盛んにすへき業もなくなりて何を以重圍を衝き君を萬死の中に救ふ如き力役に服すへきや

曰凡人と生れては必父母あり士となりては必君あり君父に事るに忠孝を竭すへきは人の人たる道なる事を知るは固有の天性にして教を待て知るに非す其道を盡さん事を思ふよりして德性に本つき條理に求め是を有道に正すは文の事也其心を治め其膽を錬り是を伎藝に驗み事業を試るは武の事也試業の姿は今の有樣に異なる事なけれと術に縋りて心を治めんとすると心に與つて術に試ると其原頭に本末の差違あり今の文武是譬は源の濁れるを措て末流より清ましめんとするか如し其本源を誤り來れは治亂に益なき事勿論なり古人の心法により糟粕を嘗め伎術を差置て唯高妙を談するは素より空論にしてい

ふに足らす伎によつて武人の强壯を求むるといへるも亦非なり今身體の强健を是とせは漁樵農夫に如くものあるへからす暑寒を冒し艱苦に堪ゆ士人の及ふ處にあらす中に就て其丁壯を選ひ武伎を訓練する事三四月節制を設て敵に當らは堅きを摧き鋭を挫く事恐くは士人に勝るへし士人もし强壯を事とせは山野に狩し海川に漁し身を雨露霜雪に曝さは演武場中霎時の試業に勝る事萬々なるへしもし又たと

び武伎によつて强健農樵に異ならさるに至るとも別に士たるの道を辨ふることなくんは畢竟農樵同等の鄙夫なり農樵は力を勞し上を喰ふの職を曠ふせさるに士として武道に闇らく下を治るの職分を盡す事能はすんは農夫にたも劣りて豈武士と稱する事を得んや今の文武に咎あるにあらされは士たるもの今に倍して精勵すへき事なれとも其學ふ所以の方法其原頭を誤る時は勞して功なきのみならす弊害又尠少ならさるといふなり敢て藝術を棄べしといふにはあらず惣て今

の儘にてあるべきは勿論なり

問君父に忠孝を竭す事も武士の武士たる道を知るも天性とはいへど教によらずしてはあるべからず其教は學校の設より成立べき事なるに其學校をも建す學問にもよらず何を以て人々をして文武の眞義を會得せしむべきや

曰治教は三代に法るべき事にて三代は大聖上に在り大賢下に居て教を敷故に學校の設けも治道を補て人材を出すに足れり今の君臣才德たとへ三代に及ばずとも治教は三代を目當とするの外なければ君相共に文武の道の離るべからざるを躰認して人君は上に在て慈愛恭儉公明正大の心を操つて是を古聖賢に質し是れを武備に練り是を聖教に施すに性情に本つき彝倫により至誠惻怛を以て臣僚を率ひ黎庶を治む執政大夫は此人君の心を躰して憂國愛君の誠を立て驕傲の私に克ち節儉の德を修め心志を苦しめ躰膚を勞し艱難に屈せず危險に懼

れず力を盡し身を致し士道の要領必如此にして遺憾なきの轍迹を履んで身を以て衆に先たち怛懐無我言を容れ人に取るの良心を推して諸有司に議つて人君の盛意を奉行し善を舉て不能を教ゆ諸有司も亦君相の意を稟て敢て己我の念を挾まず忠誠無二便焉として各力を其職分に盡し廉介正直共に士道を執て其僚屬を奬勵し公に奉し下を治む又文武術の師範に諭して其蒙昧を啓らき固執鄙野の陋習を去て上君相に視て門弟子を誘ふに眞文眞武を以てし治教を裨益せん事を誨ゆ如此なれは文武の教學校の政已に廟堂の上に立を以て臣僚自から道に嚮ひ士道の盡さん事を思ふは自然の勢にして人々君相の心を心とするに至れば經史を閲し刀槍を試る皆淵源あつて空文偏武の伎能に流れず悉く其用を爲さすといふ事なし是そ眞文眞武の治教にして風俗淳厚質實に歸し人材も亦是より出ん事何の疑かあるべき

或問

著作の時は萬延より文久年間にあるなるべし

越前藩當時事ヲ興スヿ多キが故ニ或ハ財用ノ足ラザルヲ憂ヘ或ハ紙幣ノ增加ヲ恐ルヽノ論アリシヲ論辯セシ書ナリ

或問國家缺くへからさるの事業におゐて財を慳まざるの論は善と雖も限りある財を以て限りなき用に供せんとするの嫌ひあり如何○答財素より限りあり用素より限りなしといへ共國家事の急なるに臨んては財用の有無を論するに遑あらす只其贍らさるを恐る國家を救ふの誠意即財を生するの源なり○問誠意ありとも實に財なくんは用足らすして誠意も行はれ難きを如何せん○答用の足らざるを恐れす唯誠意の足らざるを恐る今人あり酒色を始め嗜慾の切なるに臨んては財の有無を問はすして能其欲を遂るか如し况哉今費す所は國家と共に費すなれは國家のあらん限りは財用限りあるへからす○今紙幣を假つて國用を辨す其元に金幣あるを以て假造の紙幣を信用するなれは大費の爲に假造原金に超過せは民情不信を抱き再び換替頻繁の覆轍を蹈んて其害救ふへからず如何○答官の爲にして紙幣多きに過れは民其害を被りて信せす國事民用の爲に其員を增す民其澤を受て疑ず昔年の貨幣は官の用に製して官の物なり今の紙幣は民の爲めに增て民の用なり民是を信せさるは民の自ら疑ふにて自ら其害を受る道理なれは決して信せさるの理なし○問信すへきの理は聞へたれとも信ずへきの實を解せず且官の爲にすると民の爲にするとの差別如何○答信すへきの實は即爲にする處において官と民との差別を明らかにするにあり譬へは官に於ゐて冗費を省き質素を尙ひ諸般の事務真率易簡にして上の供給も非常の麁略を用ひ給ひ御臺所の御收納よりは御不相應といふ計に省畧を行ひ給はゝ紙幣の官の爲に費ゆる事少くして民に贍すの餘りあるを知るべし又惠恤の道民生國用の爲めには大費を厭ひ玉はすんば民の爲に紙幣の過分ならては辨すへから

さる事自ら分明なるべし○問紙幣の用に官民の別ある事は聞く事を得たれ共近年の時勢を以て是を推すに少嫌なき事能はす先年迄節儉の令嚴重にして官の省略毫も遺憾なく專ら損上益下の御趣意とは聞へたれとも儉を敎へられたるのみにして未だ官の損する處を以て下に益し給ふの實迹を見ざりしに近年に至り上下儉を弛へて下に益し給ふの政迹莫大の事なる故上下の情和樂通暢して萬歲例しなき恩惠にて列藩無比の盛事なり然れとも下に施す法如此にして上の費す處もまた如此ならんには上下竟へすして驕奢の風習に流れ其用給せす遂には共に困窮の地に陷らん事を恐れ惠を得て感戴せす今日の豐樂却て將來の窮迫を招かん事を杞憂するの物議紛然として制し止むへからす不信の人心實迹に先立て瓦解せんとするか如し如何○答昨日は無窮の太平を保ち上下和樂の地に立へきの時なり今日は是に異なり必戰の士氣を撓まさすして益是を振起し天下の不虞に先立んとす

いかてか頃日太平の日に比すへき然りと云へとも今又別に嚴令を下し士民の和氣を損はん事は非政の極たれは此時に當つては君相は勿論當路の諸有司身を以て先立專ら驕奢の心を撿束して眞率易簡の風習を起し既に私營の爲に費すの薄きを示し明らかにし民に厚ふするの實行を己か身上に切にし夜日の勤勞一息の間斷なく廟堂の勵精人をして驚愕せしむる斗に治弊を一變せられんには誰あつて感動信隨せさるへきや所謂禹の聞然なきか如くならむ今の習俗の憂ふる所は憂とするに足らさるべし

海外の形勢を說き併せて防國を論ず

此文題跋ヲ失ス議論簡短ナリト雖モ先生ノ經綸規模宏大ニシテ先見ノ明確ナルヲ見ルベキナリ

方今五大洲中魯英亞自然に鼎立の勢を爲す其餘萬國の多きは三國に

黨與附屬するのみ

魯は大國なれ共元來陸國にして海運は不便なり其志五大洲を併呑するに在れ共未た宿志を逞ふするとを得さるものは獨地勢の海運に不便なるを以てなり嚮に教法より事起り獨爾と戰爭に及ひしとき直に獨爾を聳て地中海に出んとす是魯の大に所欲也英之を聞て深く恐れ佛郎西諸國同盟して遂に獨爾を援け魯を防きしは萬一魯志を地中海に得る時は英の困窮之に過きたるとなけれは也魯又既に地中海に志を得さりしかは不得止と直に東察加に出てこれより大に海軍を起すの志あり此に於て我邦の接境たるを以て彼又姑く善隣の道を以て和親交結せんか爲壬寅の使節云ヲコせるは其深志遠謀可察識ものなり英又早く其機を知り屢日本及蝦夷地に來て條約を求るは魯の情態を深く恐るゝ所あれはなり所謂日本并蝦夷地は魯英の爭地と嗚呼眼孔を開き大寐を醒すへきことならすや

亞は尤晩進の國なれ共其國土人心盛大にして賢を薦め善に從ひ萬國盛衰の迹に明にして短を舍長を取制度を立ると勝れたるへし其國是とする所萬國の戰爭を息め交易の道を以て諸國の情を通し善に從ふの道は之を世界に取る是等宏大の規模に至ては決して他邦の及はさる所なり且又人の國を覬覦し人の土地を掠奪するの類此國には絶て無之とは大に利害に明かなる所なり幸に來て交和を求む我又是等の國と深く交り我國の羽翼とせんは策を得たりと謂つへし無識無策世の所謂和魂なるもの却て彼を無道禽獸なりとし尤甚しきは之を仇讎とし之を拒む天地の量日月の明を以て之を觀は何とか云はんァ、隘陋國家蒼生を誤る痛嘆の至ならすや（世の和魂なるもの徒らに形迹に拘泥し苟套に因襲し故習を株守するは神武日本武天智の如き賢王英輔の賊なり平らき土地を闢き制度を明らかにし民產を制し大に經綸を明かにし國光を顯はす之に非さるは和魂と謂ふ可らす）

交易の道勝手に交易し又物を以て物に易るに利あり

武備を嚴にし士氣を壯にすると尤軍艦にあり軍艦乘組の日即ち士皆必死險海を行と坦路の如し應援自由又軍艦ある時は當時の礮臺十に八九無用に屬し而て武備の嚴なると霄壤の相違なり故に艦既に備はる時は京師警衛を始悉く無用と謂へし

軍艦之を亞に謀りて悉く之を異域に取るへし我沿海の地大要四五百艘を備ふるに至らは金城の堅めなるへし（大抵五萬石に一艘を設くへし此と別に說あり且又造船我國に於けるものは其製英大なるのみならす大洋中は乘難しと知るへし）

和好の國々へ傳習生を遣はすと尤佳又商館を建へし且又第一江戸の地へ諸學科の道場を搆へ諸國より其人を借受られ三兵の敎師を始分折物產航海曆算器百工の巧者をして大に諸學科を開き狹隘固陋の習を一變すへし

天地の道窮すれは則變す變すれは則通すると一定の理なし國勢の卑弱今日に及ふと雖も變通の道其宜きを得れは元來地勢の靈人民の殖

人心の大患

數年の後大に興るへきは必然なり且又方今五大洲中の勢英に歸せされは則魯に歸す英魯兩立すへからす是又勢止むへからず此に於て我邦一視同仁明らかに天地の大道を以て深く彼等の私を說破し萬國自ら安全の道を示すへきも我國の萬國に冠絕して永く帝國の尊號欠るとなきは今日の習氣を一變して天地の大道に歸せしむるにあり

處時變議　文久三年著

文久三亥年將軍上洛ノ日春岳公愚藏職ヲ京師ニテ辭シ命ヲ待タズシテ歸藩而シ上下殆ト目的ニ惑フノ狀況アリ仍テ此論有リ

近年天下之形勢次第に指迫り別而昨春已來京師を初關西之模樣殆治を離れ亂に入らんとするの兆あれは

老公御登職に付ては專ら御忠誠を盡され何分にも

公武之御一和萬民之安堵被安　宸襟再ひ太平之天に御挽回被遊度と
萬緒之御苦心被爲在二百年之廢典をも被興　御上洛之上君臣之大義
名分を天下に明らかにせられ御合躰御純熟之上猶又治安之御施策も
可被爲在御廟算なりしかとも京地之風景は攘夷之暴論盛んに行はれ
不容易次第之上英國よりは生麥一件申出內外之險難切迫に及ひ一歩
之進退實に治亂之經界とも可相成勢にて天下之有志握拳扼腕之折柄
なれは况哉本藩之士人に於ては老若を不論　兩君上之御大事臣子身
命を致すの秋と存詰一統及奮發たりしは中世未曾有之振興なりしに
老公には無御據御運ひにて御辭職之上御歸國たりと雖も素より之
御忠節に於て者毫も御間斷不被爲在候故今後何時によらす攝海に事
ありて京地の騷きとも相成らんには兩君共に速に御出馬有て勤　王
之御旗を可被進　思召之旨一統へ御直に被仰渡も有之何れも必戰之
覺悟を極め罷在處京師朝野の形勢今にも事の破れに可及勢ひなりし

世界共
蒸氣船
安島河港

もいつとなく又太平を甘んし因循に安んする風習に押移り激烈之暴
論も稍退縮し來航之夷情も何故かはしらす愈々平穩之成行なれは夫
につれ奮發之士氣も自然に相撓み元之偸安の舊習に復せんとするは
本藩も免れ得さるの勢となれり凡久治之弊習者驕奢淫佚之爲に綱常
を紊り上下困窮に及ひ遂に生民の塗炭を致す事殆亂世よりも甚敷事
有て方今の世態已に其極に至れるより事起りたれは今暫因循して亂
に及はすとも遂に亂れさる事を得さるは必然の勢なれは今の時に當
つて稍奮發せし士氣を撓めすゑ太平の氣習を去て眞の治道を興して
亂世に備へ事あるに臨んて天下の先鞭たらすんはあらすされは如何
して眞の治道を興すといはんに飽まて士民の好惡疾苦を察し採訪救
恤に心力を盡し又緊要闕くへからさるの事業に於而者財を竭して慳
まさるにあり今國家已に士民を惠恤するの端緒を開き加之三大事業
を興せり農兵なり燕氣船なり安島開港なり事皆大難大費にあらさる

はなし仍て世上其難と毀とを見て大に疑懼の論を發し頗其理ありといへ共疑懼を以止へきの事業にあらされは愈是を實行に施し信義を明らかにして其世俗の見を破るに如す唯此三大事業のみならす怠惰を警め疾苦を問ふ是を君相の身に躬して身自から其難に當るにあらされは實に世俗の疑懼する如く事は成らすして國の敗れん事必せり今　老公已に天下の重望を負せられ舉國其德を慕ひ其惠に懷き仰き信する事天の如くなれは無爲にして益其德を修め給ひ　當公是に繼き給ひ　御身を以て其德惠を擴充し給はん事譬へは舜の時に當つて禹の庶政を修めし如くし玉ひ自ら農兵を撿閲して士卒と動作休憩を共にし給ひ自ら蒸氣船に乘て風濤の險を試み玉ひ自ら開港の地を撿査して經濟の事業を實にし給ふを始め其他自ら糧を裹んで難風火災に赴き給ふは申に及はす常に自ら執政諸有司を率ひ封疆を巡視して下民の苦樂を問ひ給ひ梳風浴雨身戰場に在すか如く鄭重煩冗を省き

212475

易簡眞率を示し給ひ歸つて廟堂に坐し玉ふ時は日々政府に臨み勵精圖治惣而富貴の風習を脫却し給ひ傍ら士民之武技を閲して心膽の練否を察し給ひ大小の炮術を訓練して敵を挫くの基業を盛んにし身心を國事に擲ち竭し給はんには士氣愈勃興して勇壯質實に歸し自ら遊惰の氣習を忘れ民生も亦其恩德に感懷して自ら貪婪私營の欲を離れ公に奉するに誠あるに至るへし是併なから良相之　上意を躬認し稷契皐陶の思ひをなし補翼贊成身心を勞し國家に竭すにあらすんは如此治道を得へからす嗚呼老公上に坐して欣然として天を樂み仁に安んし　當公之商議に就て裁制を事とし給ひ　當公は是を受て治道を勵し良相の翼け汲々孜々嚔々然として息む事なくんは虞廷の治も庶幾すへし有苗の狂頑も鎭むへし天下の治亂に於て又何をか憂ひ何をか慮らん

建白類

幕府に建言　七條　文久二年

春岳侯惣裁職の日先生江戸邸に在て上聞する所なり元九條なり即ち自筆の草案を刪出せし中二條に除點あり村田氏寿氏云當時先生謂斯の二條固り舉行せざる可らす然れとも幕吏急に舉行する能はざるの事情有るを以て併せて他の七條を妨遏するの恐れ有り因て須臾二條を削り他日を待つ云々と

大將軍上洛謝列世之無禮

止諸侯參勤爲述職

歸諸侯室家

不限外藩譜代撰賢爲政官

大開言路與天下爲公共之政

興海軍强兵威

止相對交易爲官交易

越前侯に呈する書　文久二年

文久二年戊三月世論紛々中越侯身上の處置立脚の地を申べたるものなり

方今天下の勢危難樣々に候中京師より　密敕を被下　幕廷の非政を被仰立干戈を被爲起候　仰言御坐候へ共誠に一大事の御所置と奉存候萬一左樣なる事有之候へは御尤なる稜々は御力の被及丈は御盡し可被成旨奉畏干戈を被起候事は方今の勢決て不可然其上列侯に於ては君臣の大義不可犯のみならす越州は親藩にて幕廷に向ひ弓矢を取候は天地醜侯ても難相成道理分明にて被仰上事に奉存候然るに天下の勢　幕廷の非政を憤り京師に志を寄候者とも國々に罷在内々は聲氣相通し候へは忽に天下に相響き　幕廷より危迫の御所置御坐可有は必然のことにて今更思召止ませられさる勢に至可申候左樣に相成行候へは事情具に　幕廷へ被仰上彌以京師に御恭順被遊決して危迫

之御所置無之樣其上被仰立候非政の稜々は速に御改正可被成次第明白言上に被及候御事と奉存候此上　幕廷御悔悟無之京師へ御迫り被成候へは夫は天地滅却の時臣子不幸の大變にて決然と御國御指上可被成候御覺悟と奉存候是則仁の至義の盡る處にて天地の間の大義始て相立可申候以上

壬戌三月　　横井平四郎

朋黨之病を建言す　文久三年

文久三年亥四月越藩朋黨の萌芽を生するを以て建言せしものなり

乍恐言上仕候三條

一朋黨は人君の不明に起り國家の大害たる事兼て御講習之第一義にて即今執政諸有司一致の躰に相見え候得共御油斷被遊候えは今日に起り可申候

朋黨は私情に起り所謂閑是非を爭ふ事に候執政諸有司に先立玉ひ

公共之明にて事々被聞召條理に隨ひ御決斷被遊候えは自然に閑是非は消へ申候是朋黨無之所以にて候

一一人之御身にて萬機を親被爲玉ふ事は不叶故に執政諸有司を立られ委任し玉ふ事に候是執政有司は人君に替りて士民に臨候故手短く申せば御名代にて候人君政事堂に出玉へは執政と同しく計らひ町在にては其奉行と共にし其他皆然る事にて　御身を以て先んじ勞し萬機に當り玉ふ故に執政諸有司は御同役にして初て委任と相成る然らすして座して諸事を聞玉ひては是政事を臣下に與へ玉ふにして御委任にては無之候

一政事を與へ玉ふ故に政事人君に出ずして執政諸有司に出候故如何なる善政美事も誰某之仕事も紛紜之議を生し候況哉聊も過失あれは甚數申唱候是則朋黨にて有之候以上

亥四月廿五日　　横井平四郎

國是十二條

或人の筆記に因るに元治元年甲子の正月將軍家茂公再度上洛春岳侯も滯京中、侯に獻言せしものなり

一不關天下之治亂一國以獨立爲本

自然の天理に則り自然の人事を盡し利害得喪一切度外に付す此の大條理明なれば吉凶禍福凡そ外事の變態人心を動すに足らす其理に隨て順應之信義をして天下に明かならんことを欲す

一尊

天朝敬　幕府

誠心奉戴非心を正し非政を匡し必す

皇國をして治平ならんことを欲す

一正風俗

風俗の正しからさる法制禁令固より廢す可からすと雖も終に是れ末政數ふるに足らす君臣一德治敎明なれば風俗自然に正に歸す所謂民免而無耻有耻且格何等の道理そ人をして感動せしむ

一擧賢才退不肖

一開言路通上下之情

一興學校

唐虞三代の大道を明にし推て西洋藝業の課に及ぼす其要は人君躬行心得に發して觀感の化に本つく

一仁士民

一信賞必罰

一富國

一强兵

一親列藩

凡そ彼に嫌疑あらは分明に正言し理あれは止む改むれは止む或は欺に其の道を以てすれは止む孟子葛伯仇餉の言其理甚た分明なり

一交外國

右十二條試に國是の目を定め儘付するに愚意を以てす以て君子の需に應す妄言の罪逃るゝ所なし幸に之を恕せよ謹呈

正月十一日　小楠

建白

慶應二丙寅年隨土肥前及越前春嶽侯四侯を京師に召さる時に幕府稍悔悟の色有り而して家茂公は猶京師に在り先生沼山に僻居すと雖も遙かに此事を聞き事或は爲す可しと乃ち起草して春嶽侯の許に建白せしものなり

幕庭御悔悟真心被爲發誠に恐悦之至也四藩之御方一日も早く御登京

御誠心一致之御申談朝廷輔佐に相成候へは　皇國之治平根本此に相立申候幕公彌以御滯京にて大久保殿初正議之人々御擧用御真心御培養是第一之所希也一統之諸侯早速に御登京は如何一と先重役被差出候方多分可有之新政之初別而御大事にて四藩之内御登京之上は大敕大號令被　仰出度

但

朝廷も御自反御自責被遊天下一統人心洗濯所希也

一大變革之御時節なれは議事院被建候筋尤至當也上院は公武御一席下院は廣く天下之人才御擧用

四藩先執政職被　仰付其餘は諸侯賢名相決之上追々御登用

皇國政府相立候上は金穀之用度一日も無んは有る可からす勘定局を被建（此人選大切也）さし寄五百萬兩位之紙幣出來　皇國政府之官印を押し通用可相成事

皇國中之知行に課し高壹萬石に百石と定め政府の貢米に可被　仰付事

但幕府御辭職なれは莫大之用度を被省諸侯室家歸國參勤相止江戸引拂にて是又莫大之省減なり十分一之貢米は當然なり紙幣は此貢米より漸々取り收之事

一、刑法局を可被建事

一、海軍局を兵庫に可被建關東諸侯之軍艦御取り寄十萬石以上之大名に仰せて高に應し人數を定め兵士を出さしめ西洋より航海師幷指揮官を乞ひ受け專ら傳習せしめ年々艦數を增し熟練之上は人心一致士氣盛興萬國之形勢と可並立事必然なり其總督官者大名之內其器に被當候人々被命以下の士官は關東諸藩當時熟練の士を擧用す可し總而用度は先つ勘定局より出し外國交易盛行之時に至れは諸港の運上交易之商稅を以て之に當つ可し此費用莫大なれは貨財運用之妙は議事

院中之人傑必す能く之を辨するものあらん

一、兵庫開港期日既に迫れり國躰名分改正之初なれは舊來の條約明白適中せさるは一々改正し公共正大百年不易之條約を定むへし唯恐くは事件に因ては忌嫌無きにしもあらさるへし是等後日之大悔と成るへきを慮り公平之判談あらん事を欲す

一、外國之交易商法之學有りて世界產物之有無をしらへ物價之尊卑を明にし廣く萬國に通商し更に又商社を結ひ互に相影響を爲す如此練熟を以て我か拙劣之人に對す殆と大人と小兒との如し是彼か大好を爲す所以なり十餘年來三港之交易我に於て一人之富を爲さす彼は總て大富之商と爲れり此現實にて是迄の交易我か大損たる事分明なり要之我より外國に乘り出さゝる之大弊にて今日之を改めんとを欲す西洋に於ては魯英佛墨蘭之五國漢土にては天津上海廣東之三港に日本商館を設け建つ可し扨內地に於て商社を建て兵庫港なれは五畿內

亡伊

四國南海道之大名は申に不及商人百姓たり共望に因ては其社に入れ同心一致いたし相共に船を仕立乘り出し交易すへし他之三港は是に準して略す唯妄に出入を禁し必す其港之鎮臺之印鑑を受け行く先之日本商館に達すべし歸帆も又同樣なり如此なれば自然に商法に熟し其利を得ること分明なり內地も又自然に彼等か奸を制し公平之交易に歸すべし是等は大事件に關れは速に議定あらんことを欲す

外國公使奉行幷諸港鎮臺等之御役人關東御辭職といへ共諸侯之長にて侯へは其職一人は旗下之士より撰ひ用に定め其餘は下院中より撰擧大小觀察右筆等之類無用に屬す廢職なるへし記錄布告等は下院にて爲すへし如此なれは簡易之政事に歸也

國躰改正に因て各國に公使を被立布告可有之事

右等件々即今之御急務歟と奉存侯學校を初御改正之諸事愚存御座侯ともも政府之御基本相立侯上御取り與之事に奉存侯至急に相認別而

不都合に御座侯へとも聊寸心表白迄に献言仕侯以上

十一月三日認　　横井平四郎順首拜

尙々柳藩十時掘津幷池邊藤來る九日頃には出京之發途可仕樣子に相聞へ申侯無間違出方いたし侯へは別紙は御見せ可被下侯也

七條　年月詳かならす

此書維新の際先生參與拜任後の書なるべし固り献言の文體に非す或曙主上御壁書の草案の大要を摘記せしものならんかと或は然らん然れとも門下の士關り聞かざる所なるが故に其詳かなるを得す今片紙に自筆せしを篋底に得たるを以て刷出す

本書同文自筆の書を武州北多摩郡藏舗村內野李左衞門所藏せり其何人より購ひ得たるを知らす因て以爲く再三試記せしものならん

一中興之立志今日に有り今日立ごとあたはす立んことを他日に求む
豈此理あらんや
一皇天を敬し祖先に事ふ本に報するの大孝なり
一萬乘の尊を屈し匹夫の卑に降る人情を察し知識を明にす
一習氣を去らされは真心亡ふ虛禮虛文此心之仇敵にあらさらんや
一驕怠の心あれば事業を勉ることあたはず事業を勉めすして何をか
我靈臺を磨かんや
一忠言必す逆ひ巧言必す順ふ此間痛く猛省し私心を去らすんはある
へからす
一戰爭之慘怛萬民之疲弊之を思ひ又思ひ更に見聞に求れは自然に真
心を發すへし
會賊等御所置下問に對　明治元年十一月八日

此稿手記日錄中に在り當時先生臥蓐中なり因て意見を手記して御下問に對へ

じものなるへし

小楠翁手錄日記拔萃

明治元年十一月八日　晴

會津侮臺等逆藩の罪狀を斷するに宜敷德川氏を以て斷案と爲す可し
德川氏一旦京師を侵し一敗後背て　王師に抗せす城門を開き兵器を
具し謹て王命を奉す慶喜僅に首領を保ち嗣子七十萬石の封を得たり
更に官軍身を拋ちて勤王し莫大の死亡夥多の疲弊其慘怛愁苦如何た
るの情實を照照し此輩をして御所置の次第絕て遺憾なからしむるに
至て即ち其當を得たりとす若し寬大の名を愛し一旦賊に黨し勢ひ窮
りて降伏する者をして初より勤王の徒と均しく本領を安堵せしむる
有らは是即姑息刑罰其當を失なうとす豈に新政の宜しく爲す可き所
ならん哉其罪狀を斷するは其情實に明詳ならされはあたはず斷案の
目的を擧て謹而對

先生江戸に遊學

四條　年月未詳

此稿孰れに向て建言せしや詳かならすと雖も文意に由て案するに文久元治年間越前に於て立案せしものならん

一方今の勢治亂に拘はらす方先一國獨立之基本を定むへし

一一國之獨立は國論を明にし好惡を定め人心を一致するに在り

一國論を明にするに内外之分あり

一王室幕府を尊奉す　所謂尊奉は其是非を問はす尊奉するにあらす非心必す国し非政必す正し心力餘さす国收

書翰類　六十三通

先生の志趣及經綸は書簡中に就て最も見るへし依て年月の序に從て編成す但

して歸る後殆と四年其所見を吐露せんと欲るに其人に乏し筑後久留米藩の教授本庄一郎が老儒學識有りと聞き書を寄る所なりれ共其答書先生の意に滿たす失望すと云然れとも後來先生も亦本論を主張せす

家書は叙次を別にす時事及論説に亘らさるものは畧して載せす

本庄一郎に答ふる別啓

奉問條々

小學之書は必しも小子の書たらさるは朱子も論説有之學者平生誦讀可仕事と奉存候自然に亘心を發し靄然たる氣象を生し脩養の益不少樣に覺申候此書陳選句讀世に行れ候え共大に本意を誤り候處多分相見え不宜樣に被存候山崎點本尤簡易にして正しく可然奉存候其他之末書皆以有益無御座樣に覺必しも參用すへからすと奉存候

近思錄山崎點本固より宜敷有之候え共無註にして初學之爲助無御坐候却而意見を付本意を失ひ候病可有御坐候葉采註全躰正當に相見え言辭も又簡易にして繁細之弊無之竊に謂朱子以來經傳之註者樣々有之候え共恐くは此葉註に及もの有御坐間敷蔡沈書傳と幷へ稱すへき歟と被存候尤一切病痕無之とは難申間或用捨いたすへきは勿論に候

（察儒も亦然り）他は語類中皆先生之書之部參用し可然奉存候

四書樣々之點本有之候え共獨り山崎點甚以正意を得殊に或問輯略附屬いたし先十分の善本と被存候近時一齋點行れ候是は專文理を主とし候點にて强て意思を付け候樣に相見え尤も不宜と奉存候

四書集註之外輯畧あり或問あり（論孟或問未定之書といへは必しも無すへからす）又語類文集之說殊に以浩大なる有之至れり盡せりと可申候學者此に就而力を極熟讀玩味いたし候えは先聖之深意を會し虛靈之心躰を明かにするに更に他に求るに不及候唯嘆すへきは學者爲己之志無之より力を此に用る事あたはす後世未書新奇可喜之處に馳せ去候是唯其心身に益なきのみならす又甚道を害するに至り此弊天下皆然りとも可申候嘆かはしき事に候

語類諸弟子之聞書之上初中晩之說混入いたし候え者固より一に一定之說とは難申候乍去未定之說に聞へ候は至て稀少に相見え先は一々

可信事に被存候尤集註は朱子畢生之力を被盡候えは往々改正に相成り別而論語中夥敷有之候舊註之說語類に多分相見え申候其舊註之說と申候而も東西義理相替り候ものは容易に無御坐候文義之捌彼是より宜敷意味も亦彼是より深位に因て改正に成り候ものにて有之候後儒信心薄候より動すれは我見を立未定之說に押片附候は妄慮輕薄之至り可心得事に奉存候

永樂大全行れ候より學者是を以朱學之要典といたし和漢古今尊奉いたす事に相成候竊に謂此書編集之本意必竟舉業之爲に設候ものにて天下蒼生に此道を明にする之本意にては聊以無之候間大抵主として文義を解候說のみ取用ひ候譬は語類之說文義を解候所勿論大切に候えとも又學者發明受用之處者往々文義を轉し現在工夫之實を示され或は古今時世にわたり事之得失義理之當否を說申され候處此理之活動尤以可味事に候此類之所は大全一切取用ひ不申候故大全に就き朱

朱子學の弊

子之說を見候えは徒に訓詁文義に規々たる俗儒之說に同しく相聞へ甚以本意を失ひ申候必竟學業之俗本たる所以此等之處に分明に相見え候且永樂藩王を以て天子を殺し天下を奪ひ胡廣楊榮金幼孜か輩國を賣り仇に仕へ君臣共に人倫を滅絕候身を以て朱子綱常之正學を世話いたし候は耻心なき之甚敷夫の武田信玄が一生論語を手に取らさるに同日にして語るへからす附記供一笑

朱子以來宋元之儒者盛大之氣象は乏敷候え共大抵師說を守支離破裂之病無御座候明淸儒者に至り候而は一向頭腦無之候より格致之訓を誤り徒に書を讀其義を講するを以て問學と心得候必竟是大全之陋習にして俗儒無用之學に陷入申候王陽明此之俗儒之弊を見候而朱子格致之訓如此と心得其知之說を唱へ別に寂禪異端之識を立候より朱王之學と二た通りに相成此道之大害誠に嘆しき事に御坐候夫陽明之非は元より論するに不及候我朱子之學之弊凡て格致之訓を誤り候に因

て和漢古今共に無用之陋儒に陷り天地之間に有益無之候故聊性氣材識有之ものは此俗儒を見て朱子學と心得或は其知之說に陷入り或は功利に入り又は學問は無用なるものに屬し一切學事を廢候樣に成り行候は尤當今天下之あり樣にて其起り本き候所者全俗儒之陋に有之慨嘆之至に御坐候

考証癖を弊

淸儒大抵考證を以學問といたし一部之皇淸經解汗牛充棟此道終に何事たる事を辨まへす候然るに是古學者是非邪正固より論するに不足候朱學を奉するもの又此考證之弊染入いたし異同條辨過喜齋大全之如き永樂以後末說之是非得失を折衷討論するを以て本意にいたし候は末弊之又末弊とも可申歟腐壞之甚しき人をして厭に堪さらしむ誠に支離破裂之至極に候獨陸稼書此之陋風を脫却いたし其說相聞へ人物も又真儒之風有之淸代一人と被存候唯經を說之間胸中陽明を闘之意離れ不申故に往々穩當を失ひ候樣に相見え候虛心見理之訓尤以大

切に奉存候

明一代之眞儒薛文靖と奉存候其外朝鮮之李退溪有之退溪却而文靖之上に出候樣に相見古今絶無之眞儒は朱子以後此二賢に止候故に讀書錄自省錄等之書は程朱之書同樣に學者可心得奉存候　皇朝之儒者惺窩特に傑出之人豪にして文運はまた開さる之際程朱之學聖人之正道たる事を被見出尊信いたされ候は非常之卓見申に不及候一生仕をいたされさるにて其志之高大なる事相あらはれ中々富貴爵祿之律す所にては無之乍恐

權現樣聖賢之道御合點參り御尊信被遊候にて者無之先學者は顧問に備り和漢古今種々の事御尋之節申上候御道具に被召候羅山なり治國の筋は却而佛氏御信用にて天海南光坊之如き內外の機密に預り所謂黑衣之宰相とも可申候是惺窩之仕を辭し退隱被致候所以にして志於伊尹之所志學於顏子之所學惺窩之心底分明に此に有之候且渡唐之打

立杯にて其志之高大なる事相知れ流石に眞儒之風有之古人と奉存候方今程朱之學行れ候は惺窩に本き山崎闇齋に成り此二賢者後學の為の篤く尊重いたすべき事に被存候別而山崎四書之點を正し或問輯略を付し朱子以後易之混雜を辨明し本義を獨行し朱易衍義を著し朱子之本意を明に被致しは無比類見識にて御座候其外小學近思錄等之如き一切朱子舊本に復し俗儒を辨し功利を斥け此道を天下に明し被申候は闇齋の功勳莫大に奉存候唯恨むらくは此學を世に明にするに主となり候故自家脩養之本地恐は薄く有之所謂專用力於內と者少しく相替り氣癖荒々敷相見え其門人も又此弊習有之候抽藩先儒大塚退野名丹右衛門初陽明を學ひ專心紙を脩養いたし眞知を見るか如に是あり候然れ共聖經に引合て平易ならす疑ひ候うちに李退溪之自省錄を見候而程朱之學之意味を曉り候年二十八にして脫然と陽明之學か絶ちみなら程朱之脩學に入り申候其の曉り候處は格致之訓にて有之候退野天資之高のみならす脩養之力格別に有之知識甚明にて候に共時之否塞に逢ひ御坐候問治國之道尤以會得いたし候代々世祿之人に終に用ひられ不申乍然老年に至り候而も國を盡へ君を愛する之誠潔深切に有之眞儒とも可申人物に御坐候其の著述と申て格別に無御坐候え共門人共語を錄し候もの有之且應答之紙面等段々相集二三

幾之綱申

冊のもの御坐候拙子本意專此語錄に云山崎之學は致知して一事を知れ人なる嘉ひ學ひ候邪に御坐候

ば一事を行ふ底之意あり是ならず又云學は初入之者之通りになるものなり男兒豈空死なんと其志功業にあり故に其學如此山崎は初程朱之書を世に廣めん事を志す故に山崎に至りて書大に廣まる此論至當歟と被存候是を要するに山崎之學者押しかたに相成り弊害無之學にては無御坐重々可心得所にて候

山崎門にて傑出に見え候人は淺見絅齋と被存候名譽を求めず貧賤に安し眞儒を以て自任し其志之高尚なるは他之儒者之及所にては無之幾と其師にも劣り不申樣相見え候然るに學意終に押究め候えば伯夷叔齊に歸し水戸西山公と同一腹之樣に見え申候大塚退野云靖献遺言は淺見之骨子と能一言にて申盡候山崎家講義成程精細に說き來り候ものにて講義に因り候ては甚以感心仕其益少からず候乍去近世儒者山崎を尊奉いたし候もの大抵講義に因て文義を解候を以て學問と心

大

六ヶ敷業

學の人
中井竹山

得曾て力を朱子原書に用ひ不申候間一向に力ら弱して知識通り不申

曰まねを以申候樣之弊風甚しく大に闇齋絅齋之學意を取り失ひ固陋寡聞之偏窟之儒者に落ちをかしく被存候

鳩巢之學は山崎之學のあらけ候弊を見候より却て俗見に落ち候樣に見え申候儒者君を得登用に逢候は鳩巢程之仕合無御座候然に立論献議彼に止り候は（能山秘錄等之書にて可見なり）

之二書一向に發揮之精神無之只々文義を解申候此流弊必す俗儒之陋に陷入り可心得事に被存候近世朱學を唱へ强有力之人は中井竹山にて有之候餘程爲す事ある之力量相見え申候然るに此人道をかしこに見而我にいたさす候唯天授明達之人にて朱子格物之學をいたし候間人事之義理は明に有之候え共尊德性之實地は一向に忘却し心術全功利之上に馳候間存養省察唯其義を說候迄にて終に何事たる事を不辨候是を要するに徂徠にして朱學を唱候ものにて此學之大くるひは竹

山にて御坐候其師五井蘭洲質疑篇を著公然世に行申候誠に私見卑陋辨するに足らす候是にても竹山之學之曲ひは相見申候徂徠は公然と功利を押出候間其非明に相見候えとも竹山は表に飾候間其非中々見え不申候且其人力量見識御坐候而世之陋儒よりは格別にて候間于今尊信も被致所謂似而非なる所にて甚以正道を妨申候如此類は明に辨せずんはあるへからす奉存候

右大抵和漢程朱を奉じ候前賢之學拙子了簡如此御坐候是前賢を評論いたす本意にて無之其人其書嚴然と世の尊信に相成り後學之楷梯にて有之候間必竟用捨いたさす候えは大なる誤にも相成候間先其人其書之得失邪正明に辨別いたし候而誠之用捨出來可申且朱子以來眞儒と被稱候人は僅に指を屈候えは此學之正當如此之難事に御坐候是に於て深く前賢之得失を明にし偏倚ならさる所に參り不申候えは忽に邪徑に落入此生を誤り候間彼是先此所辨せずんはあるへからす候乍

去固陋寡聞之私是より見候間勿論間違のみ可有御坐候是御叱正を奉願候願望に御坐候御而倒なから少も無御遠慮御書入被仰聞可被下此外御質し申度事は後日に付し置先此段拜呈仕候以上

八月十日

藤田虎之助に與ふる書(嘉永四年)

一書拜呈仕候時下愈御安全に被成御坐珍重之御義に奉祝候先以往年於江戸屢奉接鳳容御懇情被成下不淺忝き仕合に奉存候以來歸鄉仕片紙も拜呈不仕誠に申譯無御坐候御無禮に押移御海容奉希候然者尊藩御盛運之時節御新政赫々海隅邊地まて相響列國廢衰實に憤興之勢にて竊に天下興運之時運と奉存月日に刮目罷在候處不圖大變に相成天下志士之膓爲之百斷仕徒に天地神明を呼悲痛感歎之外更に他事無御坐候然る處無程大寃表白御安全に被成御歸鄉眞以重々至悅之御事にて爲天下若生奉賀悅候抑黨禍之事史冊上歷々照々と明鑑有之而

宮部鼎藏は藩の軍學家なり是れより先き先生の教を受門に入り依て其遊歷の時藤田東湖に紹介する所の書なり後宮部先生の門を跳絶し長州に脫走し京師にて幕の羅兵の爲めに殺さる

已ならす歐陽永叔朱子之諸公於此者別而心肝を碎き痛論辨白に相成聊以疑惑之筋無御坐道理に候え共古今天下之禍必此朋黨之二字に有之尤以當今天下列藩之大病根にて君子之正氣日々消小人之邪氣日々長異日之患不可言に相成候は必然之勢に奉存候就而者無事を好み風波を恐る上下之情如此に候え者君子之大道決して行れ申間敷痛心大息何堪々々久留米村上守太郎一件眞に悲痛之至に奉存候捨身刺姦或は過たりといへ共必竟是赤心報國可敬可仰爲同藩もの其志を繼是非共君之非心を正し先公之御遺志を奉達へき事に候處國論顚倒大抵村上を非斥致し甚しきは喪心人之樣に唱候由に承り申候扨々無是非次第ながら憤怒に堪不申小生は村上知音にては無御座候え共其人物追々承り去年書狀遣し通問仕且御歸鄉後他處御取遣も不苦御樣子承り申候間村上に相賴一封差出申候處無程變事出來心事達不申別而感歎千萬に奉存候志士一人之喪亡は實に天下之義鋒かけ候樣之心地仕可

惜之至に御座候同藩宮部鼎藏列今度遊歷として罷出尊藩之御事は別而迂生嚮暮仕此節主として拜趨仕候間乍憚萬端御敎示被成下候樣奉賴候右鼎藏者兵學を主と仕候間其筋之事別而拜聞仕度心願に御座候小生身上萬端是より御承知可被成下候心事海山拜呈仕度事御座候得共先右之次第迄申上候是よりは追々書狀差出萬端相伺度奉存候間乍御面倒其心得被成下度奉願候頓首拜

横井平四郎

二月十五日

時存必

藤田虎之助樣

尙々近況如何被成御座候哉乍憚爲天下御自愛被成下度奉存候小生事當月十八日より國許發程上方迄罷越往來諸所遊歷仕筈に御坐候此節は江戸にも罷出尊藩に拜趨自來之心情相述御安否奉伺度御座候え共其義出來不申甚以遺憾千萬に奉存候尾紀越前加賀因州藝州長州等之

國には打廻り申候筈に付歸郷後者見聞錄差出可申何も奉期後厂候以上

越藩岡田に答ふる書(嘉永四年)

前同畧

先生浸遊歸郷の後岡田が質問に答る所の書なり岡田は越前吉田東篁の弟なり

日本之書にては熊澤之集義和書は格別に相見申候尤外書之方は甚以疑しく決して熊澤之書にては有御座間敷と兼々存罷在り去年岡山へ參り承り候處彼方にては僞書に相違無御座と申事にて疑晴れ申候是は大に俗論のみにて見る可きものには無御座候

至善を事上と心上と御引分之高論尤以明白にて重々御同意に奉存候然るに事上心上二にて無之今一事に處するに至當を得たるは是理之至善なり是にて安心と心得れは油斷に相成忽に事理を失うに至る故其理之至當なる所にて其事に處すれとも此心は未た盡さゝると思ふ所無之而は不相成是則心上無窮之至善なり是事に處する上にて云な

り況や一身を修る國天下を治る尤此心得にて二に離不申候是則至善たる所と奉存候如何々々

尊藩諸賢愈御進歩被成候段大慶此事に奉存候尤村田君矢島君御長進之由東篁先生より申參り此許も兩三輩は大分長進いたし深く悅ひ候事に奉存候野村君彦根御出浮之御樣子承り申候南部は乍ニ人才學路正しからす是は甚以殘念千萬に奉存候其外は一向人物無御坐候段扨々心痛之至りどふとか可致樣は無御坐哉と案勞致し候然し行末は何歟變代も可有之何分此藩は終始此道に引入申度吳々奉存候此節數通相認縷々奉復出來不申畧呈仕候

七月十日

越藩岡田に與ふる書(嘉永六年)

前略

尊藩薔冬之御樣子又々御都合宜方に相成候段重々目出度奉存候根本

米國使節必ず將に來らんとす而して天下の有志